刀使ノ巫女　笑顔の守り人

桜庭カイナ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

笑顔を守る刀使　剣崎藍華

みんなの笑顔を守るために刀使となった藍華は折神親衛隊の一員となり真希達と共に苦難に立ち向かって行く

目次

プロローグ 1
第一話 8
第二話 15
第三話 22
第四話 30
第五話 39
第六話 49
第七話 57
第八話 64
第九話 71
胎動編
第十話 78
第十一話 90
第十二話 98
第十三話 106
第十四話 117
第十五話 127
第十六話 146
第十七話 159
第十八話 169

プロローグ

刀使。それは荒魂を斬り祓う神薙ぎの巫女達。
荒魂は珠鋼と呼ばれる御刀を作るための物質から出される不純物のノロから生まれる異形の生物であり、様々な災厄を引き起こす。
それら荒魂を鎮める事ができるのは御刀を持つ刀使のみであり、唯一の対抗手段である
これはその刀使である一人の少女の物語である
朝9時前のとある駅前。スーツ姿のサラリーマンや学校指定のバックを背負う学生達で混雑し、タクシーとバスの乗り場には長い列ができている。
その駅前広場には大きな時計がそびえ立ち、天然芝が生い茂げ休憩用の木製ベンチがいくつか置かれていた。
そのベンチには泣きじゃくっている紺色の長袖シャツ姿の少年と灰色のフード付きパーカー姿の少女が腰掛けていた。
淡い青色のウェーブがかかったセミロングの髪にルビーの様な赤い眼を持ち、背中には刀使に支給される帯刀用器具で固定された大太刀型の御刀を背負っていた

「ひっく…えっぐ…お母さん…」
「ねえ?お母さんとはぐれたのはいつ頃かな?」
「ついさっき…電車からたくさんの人が降りてきて、その人たちに押されちゃって…」
どうやら少年は母親とはぐれてしまったようだった。通勤ラッシュのこの時間とはいえ、こんな小さな男子を放置するなんて。少女はそんな事を思いながら、少年の頭をやさしく撫でた
「大丈夫!私も一緒に探してあげるから!君、名前は?」
「…翔太。桜庭翔太（さくらばしょうた）だよ…お姉さんは?」
「ふふん。私は笑顔を守る刀使!剣崎藍華（けんざきあいか）!」
剣崎藍華と名乗った刀使は溢れんばかりの笑顔を浮かべて、翔太へサムズアップした。翔太は涙を袖で拭うと、藍華にサムズアップをし返した。すると背後から女性の声がかすかに聞こえた
「翔太ー!どこにいるのー!翔太ー!」
二人は振り返ると、肩掛け用の茶色いカバンを下げた２０代後半の女性が翔太を探していた。
「お母さん!お母さーん!」
翔太はベンチから立ち上がり母親に向けて小さな右手を大きく振る。翔太の声に気

付いた母親は翔太の元へと駆け寄り、彼を抱きしめる。
「ああ…良かった！」
「この人が…藍華お姉さんが僕を元気付けてくれたの」
母親に「ありがとうございました」と何度もお礼を言われた藍華は先程と同じように笑顔でサムズアップする。
「大丈夫です！翔太くんとお母さんの笑顔を守れて、私も嬉しいですから！」
時計台から学校のチャイムを思わせる大きな音が駅前広場に鳴り響く。藍華は９時を示す時計台に目をやると、突如一気に顔が青ざめた
「いけない！もう遅刻確定だよこれ！」
藍華はベンチ近くに止めてあった白色のネイキッド型バイクに跨り、ヘルメットをかぶるとバイクのエンジンをかける。
「ごめんね！お姉ちゃん、もう行かなきゃ！もうはぐれちゃダメだよー！」
藍華は翔太にそう言って手を振るとバイクを走らせ、ある場所へと向かった。

「寿々花、今の時刻は？」
「午前９時２８分ですわ。真希さん」
「剣崎さんから遅延の連絡はありません」

「もー！いつ来るのー！その剣崎って人！」
　刀使の頂点に立つ大災厄の英雄である折神紫を守護する親衛隊達。親衛隊第一席獅童真希。第二席此花寿々花。第三席皐月夜見。第四席燕結芽。
　折神家本部にある親衛隊用の談話室にて藍華を待つ彼女達は待ちくたびれた様子だった。
「配属初日から遅刻し連絡も無しなど！刀使以前の問題じゃないか！僕達はまだしも！紫様をも待たせるなんて！不敬にも程がある！」
「配属初日から遅刻なんて、まったくいいご身分なことですわ」
　真希は怒り心頭な様子で叫び、寿々花は心底呆れた様子で皮肉を吐く
　夜見は相変わらず無表情のままで沈黙し、結芽は退屈そうにソファーに寝そべっていた。
　すると外からバイクのエンジン音が聞こえ、だんだん音が大きくなり激しいブレーキ音が鳴ったのを最後に外は静かになった
「ひょっとして……藍華さんでしょうか？」
　寿々花が窓に近づいてロックを外して窓を開けた瞬間、突如黒い影が寿々花の前に現れた。
「なっ!?」

寿々花は刀使としての本能でその場からバックステップし距離を取り、御刀の柄を握り居合の構えをとる。

「遅れてすいません！本日配属となりました！折神親衛隊第五席！剣崎藍華です！」

窓枠に掴まっていた黒い影の正体もとい藍華は窓から談話室に入ると、笑顔で寿々花達親衛隊に自己紹介をした。だが、歓迎ムードとは程遠い親衛隊４人の雰囲気に藍華の笑顔は苦笑いに変わった

「剣崎さん。いまの時刻をいいなさい」

「……９時３０分です」

「事前に伝えた集合時刻をいいなさい」

「…９時です」

「貴女は窓から部屋に入る様に両親に教わったのですか？」

「いえ……まったく……」

遅刻するだけでなく窓から談話室に入るという非常識さに堪忍袋の尾が切れたのか、寿々花は藍華に必要以上に分かりきった質問を投げかけ続ける。

その様子をただ苦笑いで見届けるしかない真希は夜見と結芽に目をやるが、助け舟は出せないとばかりに２人は首を左右に振った。

「遅刻した理由が迷子探しですって？貴女は物事の優先順位を間違えています。配属初

日に遅刻して自分の印象を悪くしてどうするんですの？」
「え……。寿々花さんは目の前に迷子で泣いている子がいても知らんぷりしちゃうんですか？」
　寿々花の言葉に藍華は悲しそうな眼をしながらそう返す。
「そ……そんなことはありません！私はただ！駅員の方々に任せるなど他のやり方が……！」
「うわー……寿々花お姉さんひどーい」
「結芽！人を薄情者みたいに言うのはおやめなさい！」
「二人とも落ち着くんだ。剣崎。君が困った人を放っておけない心優しい刀使なのは分かったよ。その優しさはずっと無くさない様にして欲しい」
　話が脱線して収集がつかなくなってきた状況を見かねた真希は助け舟を出した。
「でも寿々花の言うように駅員や警察に任せるやり方があったはずだ。現に君は遅刻し、他の公務がある紫様と僕達に迷惑をかけた訳だからね。そこは反省してくれ」
「……はい。すいませんでした！」
　真希の正論に返す言葉もない様子の藍華は謝罪し、深く頭を下げる。
　深く反省した様子を見た真希は寿々花に目をやると、寿々花は頷いた。彼女もこれ以上遅刻したことに対して何か言うつもりはないようだ。

「よし。もう遅刻の話は終わりだ。僕達も自己紹介しておこうか」
「はーい！親衛隊第四席！燕結芽！この中で一番強いの！剣崎お姉さんも強いんだよねー？私と手合わせしようよ！」
「結芽。時間がないのですから後になさい。私は第二席。此花寿々花ですわ。寿々花で構いません」
　寿々花は先程まで退屈そうにしていた結芽は藍華に走り寄り、目を輝かせながら自己紹介する結芽を制止しながら自己紹介した。
「親衛隊第三席の皐月夜見です。どうぞ…お見知り置きを」
「そして僕が第一席の獅童真希だ。剣崎、改めて君も自己紹介してくれ」
「はい！私は今日から折神親衛隊第五席になります！みんなの笑顔を守る刀使！剣崎藍華です！」
　藍華はそう自己紹介をし、四人に向けて溢れんばかりの笑顔でサムズアップした。
　藍華と真希達まだ知る由もなかった。藍華はこの親衛隊になくてはならない存在となる事を。藍華は親衛隊の笑顔を守る為に大切なものを失う日が来ることを。

第一話

自己紹介を終えた藍華は夜見と共に紫の執務室へ向かうことになった。
藍華は夜見を先頭に赤い絨毯が敷かれた長い廊下を歩いていると、たまたま通りかかった何人かの刀使の視線を集めた
「あの人が第五席に…」
「本当に真希様たちと同格の実力があるのかしら?」
刀使達は聞いていて気分が良いものではないひそひそ話をしているが、そんな話は聞こえていない藍華は笑顔で挨拶して、サムズアップをしてみせた。刀使達の反応は薄かったが会釈だけは返してくれた。
「うーん……なんか反応が薄かったなぁ…」
藍華は期待していた反応を得られなかった事に不満だったらしく、次はどんな挨拶をしようか頭の中で何通りかの挨拶の仕方を考えながら夜見の後ろをついて歩く
「剣崎さん、こちらです」
「え?あ、ああ!ごめんごめん!」
次は名刺を作って笑顔で渡して挨拶をしてみようと決意していると、藍華は夜見の声

でいつの間にか紫の執務室のドアを通り過ぎていたことに気づいた。藍華が急いでドアの前に戻ったのを確認した夜見はドアをノックする

「紫様。剣崎藍華さんをお連れしました」

「ああ。入れ」

入室の許可を聞き、夜見はドアを開けて藍華と共に執務室へ入室した。執務室の中央には来客用にテーブルとその両端にソファーが向かい合って置かれており、その奥のデスクチェアにこれから藍華が警護すべき刀使が腰掛けていた。

折神紫。二天一流を極め、１９９８年９月に起こった相模湾岸大災厄で大荒魂を倒した英雄だ。その英雄は藍華と夜見が入室すると、藍華に視線を向けた。

「予定より遅かったな、剣崎藍華」

「はい。申し訳ありませ……ん?」

藍華は遅刻したことを謝罪しようと頭を下げようとした瞬間、なんとも言い難い違和感を覚えた。刀使なら知らぬ者はいない英雄を前にして緊張してる藍華だが、それとは関係ないことだけは理解していた。

しかし、この違和感の原因が何かは藍華は全く分からなかった。

「……どうかしたか?」

「ああ…いえ。申し訳ありませんでした!」

　これ以上失礼な真似をするのはマズイと思った藍華は紫に頭を下げた。
「まあいい。大方、迷い子の親探しを手伝っていたのだろう？困っている者を助けずにはいられない刀使だと結月から聞いていたからな」
「結月って…相楽学長ですか？」
「ああ。お前の事は結月から詳しく聞かせてもらっている」
　相楽結月。藍華の母校である綾小路武芸学舎の学長であり、相模湾岸大災厄当時に活躍した紫率いる特務隊メンバーの副隊長を務めた女性だ。
　一見クールで近寄りがたい印象だが、彼女は生徒一人一人をよく見てくれていた。藍華も例外ではなく相談に何度も乗ってもらい、今回の様に人助けで遅刻を重ねた日は学長直々に指導された事もあった。
「剣崎さんは綾小路の生徒だったのですか？」
「うん！相楽学長ってほんといい人なんだよ！最初はちょっと恐そうだったけど、悩みとか親身になって聞いてくれたし！あと……」
　紫を放っておいて相楽学長の話で盛り上がりかけた藍華だが、夜見の冷ややかな視線に気づき、紫に向き直って再び頭を下げた
「重ね重ね申し訳ありません…」
「構わない。随分結月を慕っているようだな。さて…本題に移ろう」

紫はデスクに両肘をつき、両手を口元で組んだ

「剣崎藍華。本日付で折神親衛隊第五席に任命する。僅か13歳でその御刀微塵丸（みじんまる）に選ばれ、その大太刀で多くの荒魂を蹴散らしてきたお前ならやれるはずだ」

「蹴散らしたと言いますか…みんなの笑顔を荒魂から奪わせないために必死だっただけです」

「だが、その功績を残せた実力は親衛隊幹部となるに足る。今後、私の力となり荒魂から人々を守って欲しい」

微塵丸。藍華が背負っている1メートルもの長さを持つ大太刀型の御刀は源義仲（みなもとのよしなか）が所有したと言われている物だ。「竜王作の長刀」「雲落とし」と併せて源義仲三代相伝の三宝とされており、全てを微塵に砕き、通らぬものはないことからこの名が付けられた

藍華はその微塵丸を持って数多くの荒魂と相対し、多くの仲間や民間人を守ってきた。綾小路入学時には既に御刀を所持しており、微塵丸を振るうに足る自慢の腕力と並外れた運動能力を駆使し、荒魂駆逐任務で何度も貢献してきたのだった

「はい！紫様の笑顔は私が守ります！」

藍華はつい先ほど真希達に見せた溢れんばかりの笑顔とサムズアップを見せる。紫は微かに微笑むと軽く頷く

「ああ、期待しているぞ。今日は本部内の施設を夜見に案内させた後は寮で休んでくれ。明日の真希と手合わせに備えて体力を温存してほしい」
「手合わせ…？」
「ああ。お前の親衛隊第五席任命に不服に思う折神家所属の刀使は少なくない。彼女達の前で親衛隊第一席である獅童真希と渡り合う実力を証明するのが手っ取り早い」
藍華は執務室まで来る途中にいた不満そうな表情を浮かべていた刀使達がいたことを思い出した。
折神家には刀使はエリート中のエリートのみが所属することが出来る。そこにどこの馬の骨かも分からない刀使が折神家に、ましてや親衛隊第五席に任命されるなど他の刀使達は納得がいかないだろう
「は…はい！紫様を失望させないよう頑張ります！」
「ああ、期待している。夜見、藍華の案内を引き続き頼む」
「承知しました。剣崎さん、行きましょう」
藍華と夜見は執務室から退出し、執務室には紫のみが残された。
紫はデスクチェアから立ち上がり日差しが差し込む大きな窓から見える空を眺め、怪しげな笑みを浮かべた
「剣崎藍華…忌まわしき過去を忘れし刀使よ。その力がどこまで役立つか楽しみだ」

「あー…ふかふかのベッドだぁー」

藍華は夜見に案内された自室にあるベッドにダイブし、枕に顔を埋めた。

夜見に食堂や書類仕事を行う際に使う親衛隊用の事務室などの折神家本部内部の施設の案内をされ終え、これから暮らす寮へと案内されたときには日はすっかり沈み、月明かりが本部敷地内を照らしていた

「手合わせ…か。真希さん強いだろうなぁ」

獅童真希。御前試合を二度も制覇した実力を持つ神道無念流の使い手。

藍華もテレビ中継で彼女が優勝した御前試合の様子を観たことがあった。彼女の怪力から繰り出される一撃は対戦相手の刀使の防御を削り、そして渾身の一撃を相手に叩き込む。初めの親衛隊幹部を務めた真希の実力は並外れていた。

明日の手合わせで、もし手も足も出せずに負けたら。もし紫様達を失望させてしまったら。そんなネガティブなイメージが頭に浮かんだ。

「大丈夫！恐くない！不安じゃない！紫様も信じてくれてたし、私は負けない！ね、微塵丸？」

ベッドから飛び上がり、壁に立てかけていた微塵丸を抱きしめる。微塵丸とは綾小路に在籍していた頃から荒魂との死闘と他の刀使との手合わせで勝利を勝ち取ってきた。

自分と微塵丸を信じて戦ってきた藍華は直ぐに不安を頭から振り払う
「さて…ささっとご飯とお風呂済まして寝ちゃおうかな。明日の私なら大丈夫！なんとかなるよ！」
　自分にそう言い聞かせた藍華は折神家職員専用の食堂へと向かった。明日に備えてスタミナが付くものを食べようと考えながら

第二話

「これより！獅童真希対剣崎藍華の試合を行う！礼！」

剣崎藍華が親衛隊第五席に任命された翌日

御前試合に使われた練武場にてスーツ姿の女性審判はそう叫んだ。真希と藍華は互いに向かい合うように立ち、試合前の礼をする。

練武場内の客席は真希と藍華の手合わせを一目見ようと訪れた刀使や折神家職員達でほとんど埋まっていた。

紫が推挙した刀使である藍華の実力をこの目で確かめたい者もいれば、単に真希目当てに来た者もいた。

「（大丈夫……恐くない……不安じゃない……）」

「（剣崎。僕は全力で君に挑む。君が親衛隊に相応しい実力があるか確かめさせてもらうよ）」

藍華は真希を目の前にし彼女の唯ならぬ闘気に恐怖を感じたが、そう自分に言い聞かせリラックスさせる。真希は最初の親衛隊と紫の威厳を守るために剣崎を全力で倒すことを決意した。紫の見る目を疑う事はしない真希だが、親衛隊に推挙されるに足る実

力を藍華は持っているかどうか彼女は確かめたかった。
「うわー……たくさん集まったね」
「親衛隊幹部同士の試合なんて、滅多に見られるものではありませんからね」
「一部、真希さん目当てのファンの方々もいるようですが」
真希側のダッグアウトには結芽達がおり、そこには紫の姿もあった。
紫の視線は藍華だけを捉え、彼女の戦い振りを目に焼き付けようとしていた。
「構え！写シ！」
審判の合図と同時に２人は御刀を抜き、真希は自身の御刀である薄緑（うすみどり）を正眼に構え、藍華は腰を少し落として八相構えをとる。
そして２人は身体に微かな白い光を纏った。
写シ。刀使の基本戦術であり最大の防御術だ。写シを発動させている状態では、わずかな痛みと精神疲労を代償に実体へのダメージを肩代わりさせることが出来る。
しかし、写シは無敵ではない。腕を斬り落とされればその部分は消失しまい、傷を受けすぎると写シは剥がれ気を失うこともあるのだ。
その写シを纏った２人はいつでも相手に飛び込んでいけるよう臨戦態勢をとる
「…始め！」
審判の合図と同時に仕掛けたのは真希だった。真希は迅移（じんい）という御刀を媒

介として通常の時間から逸して加速する攻撃術を発動させ一気に藍華との距離を詰め、薄緑を彼女にめがけて振り下ろした。

藍華は微塵丸で防御の構えをとり、真希の一撃を受け止める。刀同士がぶつかって鳴る音より遥かに重い剣戟音が練武場内に響き渡った。

強い衝撃が御刀から伝わり、藍華の両腕に痛みと痺れを与える

「(ッ！重い！)」

真希はそこから攻撃の手を一切緩めず、無数の斬撃を藍華に叩き込む。

藍華の微塵丸は全長約1メートルの大太刀で薄緑と比べてリーチは勝るものの、取り回しは劣る。

リーチの長い大太刀は相手に密着された状態では真価を発揮できない。

真希の狙いはそれにあり、藍華に反撃の隙を与えず一気に倒す戦法を取ったのだ

「(これで根を上げるなら、僕は君を親衛隊第五席とは認めない！)」

藍華は真希の猛攻を防いではいるが、ロクな反撃も出来ず完全なジリ貧の状態に立たされていた。距離を取ろうと迅移で後ろに下がっても真希はそれを許さず、即座に迅移で距離を詰めて息つく暇を与えないよう攻撃を続ける

「もうー。剣崎お姉さん全然ダメじゃん！」

完全に防戦一方な藍華に結芽は頬を膨らませながらそうぼやいた。親衛隊第一席で

ある獅童真希の猛攻を受け止め続けるのは並の刀使では到底できないことだ。しかし、ただ防御に優れているだけでは真希はもちろん結芽達は藍華を第五席として認めはしないだろう。この試合を見て寿々花と夜見も藍華の実力に疑いを持ち始めた時だった。

「(まずい！)」

真希の斬り上げに防御の構えを崩された藍華は、両腕を上げ腹を晒す状態となった。真希はそれを見逃さず藍華の胴払いを叩き込もうと薄緑を渾身の力で振る。真希の勝ちだ。結芽達と観客達はそう確信した

「(大丈夫！負けない！)」

藍華は左手を微塵丸から左手を離すと、握り拳を作り手の甲で薄緑の刃を受け止めた。その拳は黄金色に輝いていた

「(金剛身か！)」

金剛身。写シとは異なり短時間しか持続しないが、金剛石の如き硬度を得ることが出来る防御術だ。

藍華は金剛身を発動させた左拳で薄緑を払い退けると、真希は微かに体勢を崩した。

「(今度はこっちの番！)」

右手のみで微塵丸を真希に目掛けて振り下ろすが、真希は迅移で藍華の左側面に回り再び攻勢に出る。

藍華は先程と同じように拳に金剛身を纏わせ攻撃を受け止めた。そのままの状態から真希に体当たりを喰らわせ無理やり距離を取らせると、微塵丸を両手で握り直して体幹を軸にして大きく薙ぎ払った

「だぁぁぁぁ！」

「クッ！」

真希は藍華の一撃を御刀で受け止めるが、渾身の力で振るわれた微塵丸は真希の防御を崩し床に転倒させ、仰向けとなった真希に向かって微塵丸を振り下ろした

「せいやぁぁぁ！」

真希は迅移で藍華の右に回り攻撃を回避する。藍華の腕力と体重を乗せて振り下ろされた微塵丸は木目の床を砕き、辺りに木片を散らばらせた。

真希は大きな隙を晒した藍華の左胸に突きを放つが、またしても金剛身を纏った拳に阻まれる。両者は仕切り直すために互いに距離を取り、睨み合いとなる

「（流石真希さん……！これが親衛隊第一席の実力！）」

「（堅固な防御に全てを薙ぎ倒す攻撃……！これが紫様が認めた実力か！）」

二人は互いを称賛しながら、相手に攻撃を仕掛ける隙をうかがっていた。どちらも息は乱れており、これ以上勝負が長引くのは互いに好ましくない状況である。

藍華と真希は互いに八相構えを取ると、同時に迅移で加速し相手の懐へ飛び込んだ。

藍華は微塵丸を袈裟懸け目掛けて振り下ろすが、真希は迅移でその一撃を躱し、藍華に大きな隙を作らせた。
「(悪いけどこれで最後だ！)」
真希は藍華が金剛身を発動させるよりも速く御刀で彼女の胴を切り裂いた。真希の一撃に写シは剥がされた藍華は仰向けに床へ倒れ込んだ
「それまで！勝者！獅童真希！」
審判は真希の勝利を宣言すると客席の観客達はベストを尽くし戦った二人に拍手を送った。真希は御刀を鞘に収めると倒れたままの藍華に近づき手を差し出した。
「見事だったよ。立てるかい？」
「……はい！真希さんも凄く強かったです！流石は親衛隊第一席ですね！」
藍華は真希の手を掴み身体を起こすと、笑顔で彼女にサムズアップしてみせた。藍華の屈託のない笑顔を見て真希を笑みを浮かべる。
「さて……君の歓迎会を開きたいところだが、まず寿々花に叱られに行かないと……」
藍華は真希の言っている事が理解できなかったが、直ぐにお叱りを受ける必要があることを理解する。ここは御前試合で毎年使われる練武場であり、もちろん今年もここで試合は行われる。その練武場の床を砕き大きなヘコみを作ってしまったのだ。
藍華は恐る恐る寿々花達がいるダッグアウトに視線を向けると、寿々花が笑顔でこち

らを見ていた。結芽は苦笑いを浮かべ、紫と夜見はため息を吐いて呆れた様子だった。

「だいじょーぶ……こわくない……こわくなーい……」

藍華はその後、正座し脚が痺れるほど長い寿々花のお叱りを受ける羽目となった。

第三話

朝日が顔を出し空が明るくなり始める早朝。折神家に所属する刀使達が暮らす寮の前にある広場にて、青いジャージ姿の藍華は早朝のトレーニングをしていた。

「ふっ！やぁ！だぁ！」

写シを纏いながら微塵丸を振るい重い斬撃を繰り出し、そこからショルダータックルや右ストレートなどの体術を繰り出す。藍華は斬撃と体術を織り交ぜた戦い方を好み、さらに金剛身で攻撃面と防御面ともに強化するバトルスタイルを持つ。

朝日が広場を照らし始めたとき、写シを解除して藍華は額の汗を手の甲で拭い微塵丸を鞘に納めた。

「藍華おねーさん！」

火照った身体に心地よい朝風を浴びていると背後から結芽の声が聞こえる。

「結芽ちゃん。おはよ…」

「あーそーぼ！」

背後を振り返ると、写シを纏った結芽が無邪気でどこか恐怖を感じさせる笑顔を見せながら、ニッカリ青江の切先を藍華の左胸に突き刺そうと迅移で距離を詰めてきた。

「えええええっ!?」

反射的に藍華は写シを発動し、金剛身を発動させた左拳で切先を受け止めると、続けて連続で繰り出された突きを再び抜いた微塵丸で防ぎ続ける。

「硬いねぇ?でも攻められないなら意味ないよ?」

「ちょっと結芽ちゃん!私、何か悪いことした!?」

「別に何も無いよ?ただ、藍華お姉さんと闘いたいだけだよ!」

結芽は藍華に休む暇を与えず、猛攻をかける。

結芽の剣は真希のとは違い受け止めた際に重みを感じないが、それを大きく補う俊敏さと攻撃の正確さを併せ持っていた。一撃を凌いでも迅移で側面や背後に回り、神速の斬撃を繰り出してくる。

金剛身を用いた自慢の防御策も攻撃タイミングをずらして、金剛身が解除される瞬間に斬りかかってくる結芽に藍華はジリ貧となっていた。

「そろそろ決めるね!」

結芽は通常の迅移を上回る速さを誇る二段迅移を発動させ、藍華の懐に飛び込んだ。

ニッカリ青江に左胸を貫かれた藍華は、鋭い痛みに意識を奪われかけるが歯を食いしばる

「痛くない!」

藍華はそう叫ぶと、左胸に突き刺さったニッカリ青江の切先を左手で掴み強引に引き抜く。そして結芽の手から引き剥がし、彼女の華奢な体に両腕を回し抱き寄せた。
「えっ！なになに!?」
「結芽ちゃん！いきなり斬りかかるなんて危ないよ！」
まるで悪戯をした子供を叱るように藍華は結芽にそう言った。結芽は困惑し、なんとか離れようとするが自身の身体と両腕をしっかり固定されており身動き出来ない。
「だってー！私ずっと留守番ばかりだもん！真希お姉さん達が任務に出てる時もだし……身体が鈍っちゃうよ！」
「え？結芽ちゃん留守番ばかりなの？」
「……うん。私が出ればすぐに終わらせられるのに」
結芽は藍華の顔を見上げながら、不満そうに口を尖らせる。
そのとき藍華は疑問を抱いた。
先程の僅かな時間の攻防を見ただけでも、結芽は真希以上の実力を持っていることが分かった。
確かに、結芽が出れば荒魂など容易く斬り捨ててくれるに違いない。しかし、彼女の口ぶりからしてロクに任務に出撃できていないのだろう。
「そっか……。じゃあ、今度手合わせする？」

「え!?ほんと!?」
「うん。だから、もう不意打ちしないって約束して？」
「分かった！約束だよ！」
　さっきの表情とは打って変わり溢れんばかりの笑顔になった結芽に、藍華も笑顔を返す。
「藍華お姉さん……そろそろ離してくれない？ちょっと苦しいし……」
「あ……ごめんね！」
　結芽は藍華に抱き寄せられているたままで、彼女のやや幼い顔立ちに不釣り合いな豊満な胸に顔を埋めている状態だ。このことに気づいた藍華は直ぐに結芽を離して、写シを解除する。
「そういえば、藍華お姉さんはもう朝ごはん食べちゃった？」
「ううん。いつも朝の稽古の後に食べてるから」
「じゃあ着替えたら一緒に食べに行こうよ。夜見お姉さんが藍華お姉さんの為におむすび作ってくれてるから」
「え？夜見さんが？」
　藍華は意外そうな顔をしながら、そう言った。
　藍華は配属初日は敷地内を案内してもらう為に、夜見と半日以上一緒にいた。移動中

に雑談でもしようと藍華から話を振ったりしていたが、夜見は終始素っ気無い様子だった。「はい」や「いいえ」以外の言葉を彼女から聞いた記憶がないぐらいに。

そんな彼女は自分の為におむすびを作ってくれているとは嬉しいのは勿論、意外にも思っていた。

「うん。だから早く早く！」

「分かった！すぐに着替えてくるね！」

藍華が駆け足で自室に戻って数分後、藍華は親衛隊に支給される制服姿で戻ってきた。制服の下に着ている白いシャツの長袖の部分は肘までまくり、下は膝上よりも少し短い紺色のスカートに黒いスパッツを穿いていた。

首元に青色のバイクゴーグルを下げ、微塵丸を帯刀用器具に固定させ背負っていた。

「どう？似合うかな？」

「うん。結構様になってるじゃん」

初めて見せる親衛隊服姿を褒めてくれた結芽に、藍華はいつもの笑顔とサムズアップを見せる。その後、結芽と夜見が待っている場所へと向かった。

「おはようございます。結芽さん。藍華さん」

しばらく敷地内を歩くと別の広場に着き、そこにはおむすびを握る夜見がいた。簡易テーブルに置かれた大皿に数十人分はあるであろうおむすびの山と、香ばしい炊き立ての米の匂いを吐き出す純銅の釜が二つ置かれていた。

「おはよう、夜見さん！わお！おむすびの山！」

「おはよう……前見た光景と同じだぁ……」

「前見た光景？」

「去年、燕さんが配属された日に同じように、歓迎会用におむすびをたくさん作りましたので」

「最初は歓迎会だって分からなかったけどね～」

おむすびの山に目を輝かせている藍華とは相対的に、結芽は苦笑いを浮かべていた

「じゃあ、今回は……」

「はい。剣崎さんの歓迎会です。どうぞ召し上がってください」

「ありがとう！いただきます！」

藍華は手を合わせると、直ぐにおむすびに手を伸ばした。一口食べると、米の甘味とちょうど良い塩味が口の中に広がる。具は入っていないが、そんなことは気にならないぐらい美味で腹も心も満たされた気分になった。

「美味しい！どうやったら、こんなに美味しく作れるの!?」

「お釜で炊いた炊き立てのお米で作っただけです。炊き立てのお米で作ったおむすびこそ、最高のお持てなしなのです」
「へぇ～。夜見さん、ありがとう！幾らでも食べれちゃうよ！」
「喜んでいただけて光栄です」
口元にご飯粒を付けながらの笑顔とサムズアップを夜見に見せると、おむすびを次々と平らげていく。
「藍華お姉さん……。少し喜び過ぎじゃない？」
「そうかな？私の為に作ってくれたおむすびだよ？すっごく嬉しいよ！」
「まだまだたくさん作りますから、たくさん召し上がってください」
「そんなに食べられないよ……って！もうお皿にあった分が無い!?」
さっきまで大皿にあったおむすびの山が姿を消していたことに気づき、結芽は驚きの声を上げた。どうやら全て藍華の胃袋に入ってしまったようだ。
「あ！ごめん！夜見さーん！追加で！」
「はい。お任せください」
「（夜見さん……か。なんだか仲良くなれそう！）」
「（藍華さん……。良好な関係を築けそうです）」
藍華と夜見は互いに仲良くなれそうな予感を感じながら、それぞれおむすびを食べて

続け、おむすびを作り続けた

第四話

『発生場所には既に機動隊が展開中！民間人の避難誘導を行っています！現場に急行してください！』

「了解です！」

藍華は右耳につけられたイヤホンから聞こえるオペレーターからの連絡に応答する。白いネイキッドタイプのバイクを走らせ、荒魂が出没した地点へと急行していた。両肘と両膝には黒いプロテクターを付け、バイク用ヘルメットを被り、防塵用のバイクゴーグルをかけていた。

その前には折神家所属の刀使が任務に使用する専用装甲車が2台走っており、先頭は真希と寿々花が乗り、その後ろには真希が指揮している部隊に所属する4人の刀使が乗っていた。

今回は藍華が初の親衛隊での荒魂討伐任務だ。荒魂の発生場所は、以前に藍華が親衛隊配属初日に訪れた駅前広場である。現地の機動隊からの報告によると、大型荒魂と十数体の小型荒魂と共に民間人を襲っているようだった。今日は週末の昼間で広場にはたくさんの民間人がおり、対処が遅れれば多数の死者が出かねない。

それは藍華も勿論分かっており、自分1人でもいち速く現場へ到着したくてたまらなかった。

人が荒魂に襲われ死に、人々から笑顔が消えて涙が流れる。それは藍華にとって自分が傷つくことよりも恐ろしいことだった。

「(速く!もっと速く!)」

『藍華!他の車両と足並みを揃えてくれ!こちらは君のように小回りが効かないんだ!』

「でも!急がないとみんなが!」

『君の気持ちは分かる!だが、僕たちはチームで対処するよう紫様に指示を受けたはずだ!』

バイクのスピードを上げ、装甲車を追い越した藍華を真希は諭すように通信で叱咤する。藍華と一戦交えた真希は彼女の実力は理解していた。たが、今回の相手は人の言葉など理解せず、本能のままに人を襲う異形の化物だ。優れた刀使でも多数の荒魂に囲まれれば命の保障はない。

何度も部隊を率いて荒魂を斬り祓ってきた真希はそれを十分理解していた。

『君が心優しい刀使なのは知っている。だからこそ、君を一人で戦わせたくないんだ』

「……すいません」

藍華はバイクのスピードを落とし、再び装甲車の後ろにつき足並みを揃えた。
「真希さん……やはり彼女は……」
「ああ、分かってる。紫様の仰っていた通り、しばらくは僕達がついていた方が良いだろう」
真希は顔を曇らせながら寿々花にそう答えながら、昨日の紫からの警告を思い出す

夜見の大量のおむすびで祝った藍華の歓迎会の後、部下の刀使から「紫様が真希様と寿々花様、夜見様にお話があるようです」と伝えられた。3人はおむすびを頬張っている藍華と、それを呆れた様子で見ている結芽を残し執務室へと向かった。
「お呼びでしょうか?」
「ああ。藍華についてだが、彼女からあまり目を離すな」
「それは……どう言う意味でしょうか?」
3人は紫の指示に疑問を持ったとき、紫はデスクの引き出しから荒魂討伐の報告書が入ったファイルを取り出した。
「藍華が参加した全ての荒魂討伐任務の報告書だ」
真希はファイルを手に取り、最初の報告書を読む。ページをめくるたびに表情は険しくなる。横から報告書を読んでいた寿々花は微かに目を見張り、夜見は無表情のまま報

告書を黙読していた。
　彼女達が驚いたのは、藍華が全ての任務で負傷していたからだ。負傷原因は全て、同行した刀使や民間人を庇ったのが原因であり、軽い打撲や浅い切創から、中には命を落としかねない重傷を負った任務もあった。
「紫様……これは……」
「その報告書を見ればわかるように、藍華は他者を救うためなら自身が傷つくのを厭わない。」
「お人好しな方だとは思ってはいましたが……」
「紫様。なぜ剣崎さんを親衛隊にスカウトされたのですか？」
「……今は詳しくは話せない。都合がいい話だが、信じて欲しい。」
　夜見は無表情のまま紫にそう問うと、紫は淡々とそう答えた。
　実力以外にも紫が藍華を親衛隊第五席に任命した理由。それが分からずとも、真希達は紫の判断に狂いはないと信じていた。
「承知しました。藍華に無茶をさせないよう我々が注意を払います」

「来るぞ！構えろ！」

機動隊を率いている隊長が叫ぶ。
ムカデのような体と鬼のようなツノが生えた頭を持つ全長約３０ｍほどの大型荒魂が、鬼の顔に四つの足が付いたような外見を持つ小型荒魂を率いて機動隊へと接近していた。
機動隊達はライオットシールドを構えて横一列に並び、フォーメーションをとっていた。重火器も勿論装備してはいるが、御刀でなければ祓えない荒魂には一時凌ぎにしかならない。
放置された車両や広場に植えられた木を蹴散らし薙ぎ倒しながら猛接近し、隊員達をその巨体で叩き潰そうと体を高く上げた。だが、その巨体は振り下ろされることはなかった。
「せいやぁぁぁ！」
藍華は写シを纏い一時的に筋力を強化し、超人体な力を発揮する刀使の戦闘術である八幡力（はちまんりき）を発動させた。
八幡力により強化された脚力と迅移を組み合わせて高く飛び上がり、数メートル上の大型荒魂の頭部へ微塵丸の刃を叩き込んだ。
頭部の甲殻に大きなヒビが入り、そこからオレンジ色の飛沫が飛んだ。
藍華そのまま落下し、八幡力で落下時の衝撃を和らげ着地した。八相構えをとり大型

荒魂と真正面から対峙する形となり、左右後方には真希達が御刀を抜き構えをとっていた。

「皆さん！後は私たちに任せてください！」

「藍華！大型の注意を引いてくれ！僕達は小型を手早く片付ける！」

「その後は一気に大型を片付けますわよ！」

大型荒魂は藍華達へ向けて威嚇の咆哮をあげる。黒ずんだ巨大な体に、全てを噛み砕く大きな牙。恐怖に足がすくみ逃げ出したい欲求に駆られる。

だが、それは許されない。

荒魂を斬り祓い人々を守る。それは刀使の使命だからだ。

「（大丈夫！恐くない！負けない！）」

藍華は自分にそう言い聞かせた。

真希達が迅移で素早く左右に展開すると同時に迅移で距離を詰め胴体に向けて微塵丸を叩き込む。鈍い打撃音が鳴り響き甲殻の欠片が宙を舞う。

藍華をなぎ倒そうと上体を鞭のように横に振るうが、迅移で腹下に潜り込まれて空を切る。

荒魂にも仲間意識があるのか、小型荒魂達も藍華に襲い掛かろうと走り寄るが、真希達にたやすく阻まれる。

お互いの死角をカバーして一体一体を確実に仕留めていく。真希と寿々花はもちろん、他の刀使達も小型荒魂に引けを取っておらず、その剣技は並みのものではなかった

小型荒魂達は次々と斬り伏せられ、オレンジ色の水たまりへと変えられた。

「藍華さん！まだ耐えられますか!?」

「はい！全然大丈夫です！」

長い胴体に等間隔にある甲殻同士の隙間に、微塵丸の刃を深々と突き刺し、そのまま抉るように強引に切り裂く。大量のノロがアスファルトの地面に滴り落ち、大型荒魂は悲鳴のような鳴き声をあげた。

「小型は殲滅した！大型への攻撃を開始！」

真希の指示と同時に、刀使達は大型荒魂の尻尾側の胴体へ攻撃を加えた。数百以上もあるでろう脚は次々と切り落とされ、胴体には無数の刀傷を付けられた。

あと一息。そう藍華達が確信したとき、大型荒魂はその巨大な頭と尾を、まるで発狂したかのように力任せに振り回し始めた。

剣撃により剥がれかけていた甲殻が剥がれノロが流れ出すが、そんな事を構う様子はない。

「きゃあっ!!」

藍華達は堪らず迅移で距離を取り回避するが、一人の刀使が逃げ遅れ反射的に御刀で

攻撃を受けた。身体中が砕けてしまいそうな衝撃を受け、十数メートルほど吹き飛ばされた。

大型荒魂になぎ倒された自動車に背中から激突し、写シが消えて力無く地面に崩れ落ちた。

大型荒魂は力無く倒れ込んだ獲物を見逃さなかった。トドメを刺すために地響きを立てながら獲物に向けて突進する。獲物を噛み砕こうと牙を突き立てるが、その牙は微塵丸の刃に阻まれた。

「こんのぉお!!」

藍華は雄叫びをあげながら迅移で距離を詰め、右側面から八幡力を用いて微塵丸を渾身の力を込めて振るった。まるで巨人に殴り飛ばされたように大型荒魂の頭はかち上げられ、微塵丸に砕かれた牙が宙を舞った。

「寿々花!」

「分かってますわ!」

その隙を逃さず、真希と寿々花は大型荒魂の胴体を挟み、お互い交差するように迅移で駆け抜けた。胴体は真っ二つになり、大型荒魂はもがき苦しみ身動きができない状態に陥った。

「藍華!」

「はい！」
藍華はその場から高く飛び上がり、彼女自身の腕力と落下による位置エネルギーが合わさった斬撃を頭部に叩き込んだ。
「せいやぁぁぁ！」
藍華の一撃を受けた大型荒魂は地面に叩きつけられ、頭部を微塵に砕かれた。大型荒魂は地面に倒れ少しの間だけ体を痙攣させたが、すぐに動かなくなった。
藍華は微塵丸を血払いし鞘に収めると、すぐに気を失っている刀使に走り寄る。
「藍華……様……」
「うん。もう大丈夫だよ」
無事を確認した藍華は彼女に優しく微笑んだ。肩を貸し、機動隊の医療班が待機している場所へと歩く。
真希と寿々花に向けて「やりました！」と言わんばかりに笑顔とサムズアップを彼女達に見せた
「陽気なものですわね」
「ああ。でも、紫様が選んだ理由が分かった気がするよ」
２人はそう話し、藍華に微笑みながら頷いた。

第五話

みんなの笑顔を守ります！

折神親衛隊第五席　剣崎藍華

そうプリントされた名刺を藍華から受け取った真希と寿々花は苦笑いを浮かべていた。夜見は相変わらず無表情だが。

「どうですか？自分では会心の出来だと思うんですけど」

「え、ええ……。すごく……貴女らしくて良いと思いますわ……」

「ああ……すごく君らしくて良いと思うよ……」

「ええ。非常に剣崎さんらしくて良いかと」

「本当ですか!?やったぁ！」

刀使の頂点である折神紫を守護する親衛隊の1人の名刺としては少し問題があるが、自信に満ち溢れた表情で感想を聞いてきた藍華に対して、3人は否定的な意見をとても口にできなかった。

「藍華さん？まさかとは思いますが……他の刀使や職員の方々にも配るつもりですの？」

「もちろん！やっぱり自己紹介は大事ですから！」
　屈託のない笑顔でそう答えた藍華を見て、再び苦笑いを浮かべる真希と寿々花であった。
　剣崎藍華は決して悪い人間ではない。人々の笑顔の為に刀使になり、前の任務でも仲間を守り荒魂の脅威を退けてくれた。自身の笑顔を絶やさず、周りの人にも笑顔を連鎖させている彼女は親衛隊のムードメーカーになりつつある。
　しかし彼女特有のノリと言うべきか、ユニークな一面に振り回される事があるのがたまにキズだと真希達は思っていた。
「あー……また紫様に勝てなかったぁ……」
「結芽ちゃん！これ、まだ渡してなかったからどうぞ！」
　そこに結芽が少し不機嫌そうにため息を吐きながら、執務室へ入ってきた。藍華はすかさず結芽にまだ渡していない名刺を渡す
「……ナニコレ？」
「名刺！どうかな？」
　結芽は真希達に目をやると、3人は目を閉じてただ頷いた。
　彼女はだいたいの状況は察する。なんともユニークな名刺を渡され、反応に困っていたと

「うーん……藍華お姉さんらしくて良いと思うけど……」
「ありがとう！昨日一生懸命考えた甲斐があったよ！」
藍華はいつもの溢れんばかりの笑顔を見せて、いつものサムズアップをする。結芽達には見慣れた光景であり、自然とこちらも笑顔になる光景だ。
「それより結芽。また紫様の執務の邪魔をしたのかい？」
「邪魔じゃないよ。少しだけ遊んでもらっただけ」
「それを邪魔と言うのです」
「だって！私ばっかりお留守番じゃん！つまんない！」
結芽は口を尖らせながらソファーに腰掛ける。まるで両親に叱られてイジけた子供のように
「結芽ちゃん。遊んでもらったっていうのは？」
「前に藍華お姉さんとしたのと同じだよ。まだ一回も勝ててないけどねー」
「燕さんは暇を見つけては紫様に勝負を挑んでいるのです。それが執務中であってもお構いなしに」
以前、藍華にいきなり勝負を挑んだように紫にも『遊び』と称して勝負を挑んでいるようだった。
「ねぇ？結芽ちゃんは何でそんなに戦いたいの？」

「……決まってるじゃん！みんなにもっと私の凄い所を見せる為だよ！弱っちい荒魂とかじゃなくて！もっと強いのと戦いたいの！」

結芽は突如興奮し、声を荒げる。彼女は焦っているようだった。

まるで実力の誇示にタイムリミットがあるかのように。

「でも結芽ちゃん。私達は荒魂達を倒して街の人々や他の刀使の仲間を守る使命があるんだよ？」

「知らない。そんなの弱いのがいけないんだよ」

結芽の弱者を蔑ろにする発言を耳にした藍華は先程の笑顔が消え、悲しげな表情を浮かべた。

「……結芽ちゃんは弱い人は傷ついてもいいって言うの？」

「藍華さん？」

「だってそうじゃん！弱いから荒魂に負けるんだよ！みんな私達みたいに強くなればいいんだよ！」

「みんながみんな、私達みたいに強いわけじゃないよ。それに戦えない民間人や子供は？その人達も弱いから傷ついてもいいの？」

「二人共、いい加減になさい」

『弱者強者関係なく全ての人々を守ろうとする刀使』と『弱肉強食を是とする刀使』

真逆の考えを持つ二人の口論はますますエスカレートし、寿々花は仲裁の為に二人の間に割って入る。
「じゃあ、もし結芽ちゃんの家族が荒魂に襲われても助けないの？」
「藍華ッ！」
「……うるさい……うるさい！家族なんてもういないよ！パパもママも……私を見捨てたんだから！」
藍華の言葉に激昂した結芽は執務室から飛び出していった。
「地雷を踏んでしまいましたわね……」
「知らなかったとはいえ、流石にアレは不味かったかと」
「寿々花さん……夜見さん……。私……何か酷いこと言ったかな？」
藍華は自分のせいで結芽を怒らせてしまった事に自責の念を持った。だが、自分の発言を思い出しても彼女を怒らせてしまった原因が分からず、ただ困惑している。
「藍華。結芽は……両親に見放されたんだ……」
「ッ!?」
「親衛隊になる前の話です。燕さんは肺の病を患いました。現代医学では治療することが出来ない病です」
「その病を患い、刀使としての力を発揮できなくなった結芽を両親は見放したのです」

藍華には理解できなかった。我が子が不治の病を患ったから見捨てる？

両親であれば側に居るべきではないのか？と。

「そして紫様は結芽の元へ来ました。親衛隊になれば、再び刀使としての力を誇示できると。結芽は私達と同じようにノロを投与したおかげで病を抑えてますが、完治したわけではありません」

「だから……結芽ちゃんは……」

自身の刀使としての力を見せつけ、人々の記憶に焼き付ける。それはいずれ病に命を奪われることが分かっていたからだ。例え自分が朽ち果てても、みんなに覚えていて欲しかったからだ。

「ごめんなさい！すぐ戻ります！」

「藍華さん!?」

藍華は先程の結芽と同じように執務室を飛び出した。自分の言葉のせいで笑顔を奪ってしまった贖罪をする為に。結芽を笑顔にする為に、笑顔の守り人は敷地内を走り回った

「はぁ……言い過ぎたかな……」

結芽は以前に藍華に勝負を挑んだ場所である、寮前広場のベンチに一人腰掛けてい

た。

両親に見放されたことを思い出させられた事に本気で腹が立ったのは事実だ。しかし藍華は結芽の生い立ちを知らず、彼女に悪気は一切なかっただろう。

頭がクールダウンした後、結芽は自己嫌悪に陥っていた。今頃、藍華は落ち込んでいるのではないかと。

「……謝りに行こうかな」

「結芽ちゃーん！」

そう呟きベンチから立ち上がろうとした時、遠くから藍華の声が聞こえた。藍華は結芽の側に走り寄ると、まるでマラソンを走り終えたかのように両手を膝につけ肩で息をする。

「藍華お姉さん！汗びしょびしょじゃん！」

「あはは……敷地内ほとんど走り回ったからね……。隣いいかな？」

結芽は頷くと少し横に座っている位置を右にずらし、藍華は隣に座り息を整える。そして、藍華は執務室での話を切り出した。

「事情は真希さんから聞いたよ……ごめん！私が無神経な事言ったせいで、結芽ちゃんに嫌な思いさせちゃって！」

「……ううん。大丈夫……私もごめんなさい。藍華お姉さんは私の事情を知らなかった

のに」
　藍華は両手を合わせ頭を下げる。向こうから謝るとは思わなかった結芽は少し驚くが、彼女も頭を下げた。
「ねぇ？藍華お姉さんのパパとママは元気なの？」
「うーん……私ね、お父さんとお母さん……いないんだ」
「……え？」
「私が十歳の時に荒魂に襲われて亡くなったんだ。どんな両親だったかも覚えてなくて」
　結芽は藍華の発言に疑問を覚えた。十歳といえば既に物心はついてるはずだ。両親のことを覚えていないはずないと。
「覚えてないってどういうこと？」
「私も荒魂に襲われて酷い怪我を負っちゃってさ。お医者さんの話だと、そのショックで記憶喪失になったらしくて」
　藍華は前髪をかき上げると、額には獣の爪に引き裂かれたような痛々しい傷跡が残っており、どれだけ深い傷を負ったか想像に難くない。
「その後は孤児院に引き取られたんだ。でも寂しくなんてないよ？先生や友達はいい人ばかりだったし、今は真希さんや結芽ちゃん達がいるから」

そう言って彼女はいつもの様に笑顔を結芽に見せる。
「ごめん。辛いこと……聞いちゃったね」
藍華の生い立ちを知った結芽は気まずそうに謝罪するが、藍華は首を横に振り笑顔でサムズアップする
「大丈夫！たとえ過去を忘れていても、私は私だから。笑顔を守る刀使の剣崎藍華だから」
「……あはっ！ほんと藍華お姉さんって笑顔が似合うね」
「ありがとう。結芽ちゃんも笑っていた方が可愛いよ？」
「ほんと？じゃあ……もっと笑顔にしてよ！私と遊んで！」
そう言って年相応の無邪気な笑顔を浮かべながら、帯刀しているニッカリ青江の柄を撫でる。
「うん！紫様や真希さん達みたいに強くないけど、私でいいなら！」
「やったぁ！じゃあやろー！」
ベンチから二人は立ち上がりお互い御刀を抜き写シを張り、広場に激しい剣戟音を鳴り響かせる。手合わせをしている時の結芽は、心の底から楽しそうな笑顔を見せてくれた
その笑顔を見て藍華は決意する。彼女の笑顔を二度と消さないようにしようと。彼

女を笑顔にさせ続けようと

第六話

「うん。我ながらなかなか！」

早朝のまだ誰もいない執務室で藍華は一人ウキウキ気分でそう呟く。

親衛隊には正式採用された制服が支給され、それを着て親衛隊は公務を行う。制服はある程度の改造は許可されており、藍華はワイシャツの袖を腕まくりし、機動性を考えスカートを少し短く切っている。

だが、今はその改造の範疇を超えている格好をしていた

「おむすび藍華ちゃん！夜見さんを笑顔にするの巻！」

藍華はいまおむすびの着ぐるみを着ているのだ。正確には白い三角の形をして、中央には顔を出す穴が空いている着ぐるみである。親衛隊第五席としての威厳などまるで無い。

そんな威厳無しの藍華が、何故こんな奇抜な格好してるかと言うと夜見の笑顔が見たいからだ。

夜見は普段無表情で、藍華は彼女の笑顔を見たことがない。

そして藍華なりに考えた夜見を笑わせる方法は、おむすびの着ぐるみを着て早朝の執

務室で待ち伏せし、必ず一番に執務室へ来る彼女を驚かす事だ。
「夜見さんはおむすび大好きだから、きっと喜ぶはずだよ！」
そんな色々突っ込みどころがある期待を胸しながら、夜見が来るのを首を長くして待っていた。
すると、廊下から聞こえてきた足音が大きくなり執務室のドアが開く。
「わー！大変だ夜見さーん！私おむすびになっちゃったー！」
「……」
「……あれ？」
目の前には夜見はいた。しかし、彼女の前には赤いスーツ姿の女性がいた。
鎌府女学院学長の高津雪那である。藍華は高津学長とは初対面であり、第一印象が決まる大事な初対面の格好がおむすびの着ぐるみ姿である。
「……剣崎藍華……何をしている？」
「おむすびの着ぐるみです。どうですか？」
「どうですか？ではない！親衛隊第五席が何故早朝からそんな間抜けな格好をしていると聞いている！」
「いやあ、夜見さんはおむすびが好きだから喜ぶかなって」
高津学長は眉間に青筋を張って声を張り上げるが、藍華は動じた様子を見せずに淡々

と質問に答える。彼女は人の怒っている様子を感じ取れないのではないかと疑いたくなるほどに。
「高津学長ですよね。初めまして。知ってるとは思いますが、名刺をどうぞ！」
「結構だ！職員達や刀使達から聞いている！貴様が妙な名刺を配っていることをな！」
「まあまあ。せっかくですし」
「いらんと言っている！いい気になるな！この人間もど…ッ！」
　高津学長は何を言いかけるが、口に片手を被せて言葉を飲み込んだ。
「もど？」
「なんでもない！夜見！報告書は後で私に届けるように！」
「承知いたしました」
　高津学長はそう言い残すと踵を返し、ドアを力強く開け執務室から立ち去った。
「んー？学長は何を言いかけたんだろう？」
「私には分かりかねます。それより藍華さん、その着ぐるみはどちらで入手されたのですか？」
「ん？ネットサーフィンしてたら偶然見つけてさ！即日配達できたから買ったんだ！どうかな？」
「はい。自分自身がおむすびになるとは、ユニークな発想で良いかと」

「ほんと？やったぁ！」
夜見の感想が余程嬉しかったのか、藍華ははしゃぎながら笑顔でサムズアップする。
夜見を笑わせることは出来なかったが、藍華は着ぐるみ姿を褒めてくれたと思って満足していた。
「ですが、公務をするのには適していませんので脱いでください。剣崎さんが着替えている間に紅茶を入れますので」
「うん。ありがとう」
藍華は着ぐるみを脱ぎ、執務室の隅へ置くとソファーに腰掛ける。
夜見は入れたての紅茶が入ったティーカップを藍華の前のテーブルに置き、自身も彼女の横に腰掛けた。
藍華は「いただきます」と言い、紅茶を飲む。フルーティーな香りに心地よいスッキリとした味わいが口の中に広がる
「美味しい！この香り好きかも！」
「それは良かったです。こちらはアールグレイと言って、産地が決まっているダージリンやアッサムとは違い、ベルガモッドと言う柑橘系の果物で香り付けしたフレーバーティーの一種です」
「へぇー…。夜見さんは紅茶にも詳しいんだね」

再びアールグレイの香りを楽しみながら、紅茶を飲み干す

「そういえば、夜見さんは高津学長の補佐も務めてるんだっけ？」

「はい。あの方が何も無い私に親衛隊となる機会を与えてくれた恩人ですから」

「何も無い？夜見さんが？」

親衛隊第三席を務めるほどの実力を持ち、紫と高津学長の補佐を務め、美味しいおむすびと紅茶を作れる。

そんな彼女が自身を「何も無い」と謙遜したのが藍華にとって理解できなかった

「はい。見ていてください」

夜見は右手の親指を口にやり、自身の糸切り歯を突き立てる。

傷からは少量の血が滲み出し、そこから小さな黒い蝶が現れた。

まるで荒魂の眼のような模様がある羽を羽ばたかせて飛び立つ。

「すごい……これ荒魂？」

「はい。この荒魂は私の体内から生まれたもので、主に偵察に運用しています。この力は学長からの贈り物なんです。御刀に選ばれずに……何もなく……何にもなれなかった私への……」

夜見は親衛隊になる前の無力な自分を思い出しながら、そう呟いた。

「高津学長は夜見さんにとって大切な人なんだね」

自身の人差し指に止まった夜見の蝶を眺めながら、藍華はそう言う。
「夜見さんは、こうやって高津学長がくれた力を使いこなしてるんだね。なら、もっと自信を持った方がいいよ?」
「自信……ですか。ですが、その力は私自身のものではなくて、高津学長から授かったものですので」
「ううん。誰かの為に頑張れるのは、本当に凄いことだよ。それが授かった力でも、夜見さんはそれを使いこなして紫様や学長の為に頑張ってるんだし」
藍華は微笑みながらそう言ってサムズアップする
夜見にとって藍華の笑顔は、太陽の光のように眩しく見えた。まるで生きている世界が違うように。
藍華はどんな幸せな人生を送ってきたのだろうと、夜見は少し興味を抱いた。
「でもノロかぁ……。私もノロアンプルを注射したけど、特に変わった感じはしなかったなぁ」
「……え? 剣崎さんは投与の際の副作用が起きなかったのですか?」
「うん。研究員の人達もビックリしてた。注射する時にチクッとはしたけど、後は別に」
夜見は目を丸くした。ありえないと。
荒魂の正体とも言える物質であるノロを投与し、身体に異常がないなど。体質の違い

で片付くほど軽くはない

真希や寿々花に結芽、もちろん夜見も投与時に副作用に襲われた。身体中に痛みが走り、頭が割れてしまいそうな頭痛、胃まで吐き出してしまいそうな吐き気に嘔吐に苦しんだのは夜見は今でも鮮明に覚えていた

「(剣崎さん……貴女は一体……)」

夜見は府に落ちなかった。藍華の生い立ちに何か秘密があるのではないかと頭には疑心の渦が広がる。

「ん?夜見さん?」

「あら?早いですわね藍華さん。おはようございます2人とも」

「おはよう、2人とも」

「おっはよー!夜見お姉さん!藍華お姉さん!」

執務室のドアが開き、真希と寿々花が入室する。そこには珍しく結芽の姿もあった。

藍華はソファーから立ち上がり、3人に笑顔で挨拶をする。

「おはよう、みんな!」

「ああ。ところで……あれは?」

「ああ、あれですか?」

真希は室内の隅に放置されたおむすびの着ぐるみを指差すと、藍華は着ぐるみを手に

取り再び着ぐるみ姿となる
「うわーー！どうしよう！私……おむすびになっちゃったーー！どうですか？」
「えっと……」
「あ、ああ……」
「うわぁ……」
藍華は夜見が来たときと同じように着ぐるみ姿で寸劇を始めて感想を求めた。
苦笑いとユニークだという感想が３人から返ってきたのは言うまでもない

第七話

《児童養護施設　あおぞら》

折神家が設立した児童養護施設であり、主に荒魂に両親を奪われた子供達を養護する場所だ。藍華の育った場所でもあり、そこには今の自分を育ててくれた恩師がいた。

某月末の１５時頃。藍華は陽だまりの正門前にバイクを止め、ヘルメットを脱ぐ。

今の藍華は親衛隊制服ではなく、灰色のフード付きパーカーとジーンズ姿だった。

２つの大きな紙袋を両手に持つと、運動場でドッジボールや鬼ごっこをして遊んでいる子供達の元へと歩いていく。

「あー！藍華ー！」

「久しぶり！藍華お姉さーん！」

一人の子供が藍華に気づき歓喜の声を上げると、他の子供達は遊びを中断して藍華の元へと一目散に走り寄り、藍華は十数人の子供達にすっかり囲まれた。

「はいはーい！良い子にしていたみんなに、藍華お姉さんからお菓子のプレゼントがありまーす！」

紙袋からチョコレートやクッキーなどが入ったお菓子の詰め合わせを取り出して、子

供達に渡す。
　これは藍華が刀使の給料日である月末に必ず行っていることであり、綾小路在学時代からの習慣となっていた。
　子供達の為のお菓子の詰め合わせを人数分購入し配ることは、藍華にとって月一に欠かせない習慣となっていた。
　我先にと詰め合わせを受け取ろうとする子供達を並ぶように嗜めながら、配っているとスカイブルーの校舎の中から藍華にとって恩師であり、母親代わりである女性が現れた。
「元気そうで何よりね。藍華ちゃん」
　黒く背中まで届く長い髪に、琥珀色の眼。おっとりとした印象を受ける顔つきを持ち、赤いフレームのメガネが印象的な女性が藍華に話しかけた。胸には《榊　千里》とプリントされたネームプレートが付けられていた
「千里（ちさと）先生！」
　藍華は母親に甘える子供の様に千里に抱きつくと、彼女は藍華の頭を優しく撫でる。まるで親子が戯れているかの様な微笑ましい光景である。
「また大きくなっちゃって……。先生の身長、抜かされちゃった」
「うん！たくさん運動して、たくさん食べたからね！」

「能天気なのは変わってないみたいだな?」
そうクールな印象を受ける声が聞こえ、藍華が声の主に目をやると第二の恩師がそこにはいた。
紺色の短髪と眼を持ち、灰色のスーツ姿の女性がいた。
藍華の母校であった綾小路武芸学舎の学長である相楽結月だった
「結月さん!あぶっ!」
「いい加減に相楽学長と呼ばんか」
千里にしたように抱きつこうとするが、結月の掌に顔を押され阻まれる
「あたた……。なんで結月さ……相楽学長があおぞらに?」
「公務が珍しく早く終わってな。少しだけ千里と話そうと思ったんだ」
「会うのは随分久しぶりだものねぇ」
千里は懐かしむように呟く。
千里は結月と同じ綾小路武芸学舎での同期であり、相模湾岸大災厄では大荒魂を討伐に向かう選抜メンバーに選ばれなかったとはいえ、負傷者の手当てや民間人の避難指示などバックアップとして活躍した過去を持つ。
「とりあえず立ち話もなんだし、座りましょうか」
そう言って千里は近場にあった木製ベンチに腰掛けると、藍華と結月は彼女の両端に

座る。
「あ、そうだ！二人にはまだ渡してなかった！これどうぞ！」
藍華は二人に自称渾身の出来である名刺をフード付きパーカーのポケットから取り出して、結月と千里に渡す。
二人は真希達のように苦笑いを浮かべる反応ではなく、胸を撫で下ろしたかのような笑顔を藍華に見せた。
「親衛隊の一員となっても、お前は変わらないな」
「えぇ。でも、貴女はそれでいいのよ」
二人は藍華の頭を丸で我が子を愛でる両親のように優しく撫でる。
唯一荒魂を斬り祓う力を持つ刀使。だが、その刀使も生身の人間であり年端もいかない少女達だ。
得体の知れない化物から人々を守る為に、刀を手にし立ち向かう。
肉体精神ともに未熟な少女達が背負うには重すぎる責務だ。
任務で命を落とし、愛する子に先立たれた悲しみに暮れる家族に見送られた者や、仲間の死を目の当たりにしてトラウマを背負い刀使を引退した者は少なくなかった。
だが、藍華は生きている。
人々の笑顔を守る為に御刀を手に取り戦い続け、周りに笑顔を振りまいていた。その

事実が結月と千里を安堵させた。
「えへへ。相楽学長に撫でられたの久しぶりな気がする」
藍華は笑顔で少し恥ずかしげにそう言う。その反応が彼女もまた幼い少女である事を現していた
「藍華。親衛隊との仲はどうだ？」
「そうそう、気になるわぁ。私は直接会えた事ないから」
「うん！」
真希はクールな第一印象とは裏腹に、真っ直ぐで熱い闘志とそれを体現したような強さを持つ刀使。
寿々花は見惚れるほど優雅で、鋭い洞察力を持つ親衛隊の頭脳的存在。
夜見は忠義に厚く、恩人のために必死に努力できる素晴らしい人。
結芽は無邪気で愛らしく、実力の証明のために戦う子。
藍華は親衛隊メンバーをそう紹介し、対面での印象や名刺を自分らしいと褒めてくれた事、おむすびの着ぐるみをユニークだと言ってくれた事も話した。
結月と千里は藍華の「褒めてくれた」は決して純粋な称賛ではないことは分かってい
た。
あおぞらで暮らしていた彼女を知っている二人には、親衛隊メンバーがどんな反応を

したかは容易に想像できた。
「またお前は反応に困るような真似を……」
「そんな事ないよ？みんな褒めてくれてたし！」
「（まあ、藍華ちゃんがそういう子だと知ってたら正直に言いづらいわよねぇ……）」
「まあ、お前が元気にやっているならそれでいいさ」
結月は諦め気味に言うと、藍華の足元にドッジボール用のボールが転がってきた
「藍華お姉さーん！一緒にドッジボールしよー！」
「やろやろー！」
藍華は足元のボールを拾い上げると、結月達の見る。二人が頷くと、彼女はボールを抱えて子供達がいるドッジボール用コートへと駆け寄っていった。
「よし！藍華！行きまーす！」
藍華は子供達の輪に入り、ドッジボールを楽しむ。
子供達にボールをうまくキャッチできるように投げ、自チームの子供に当たったボールを地面につく前にキャッチしたり、子供達が楽しめるようにドッジボールに参加していた。
「ねぇ結月……あの子に不幸は似合わないわよね？」
「当たり前だ。もうあんな目には遭わせない為にこのあおぞらに入所させたんだ。そし

て綾小路に入学させ、親衛隊に入隊するよう促した。私とお前、紫と共に藍華を導く為にな」

千里は結月にそう問うと、彼女は愚問だと言わんばかりにそう返した。

藍華の笑顔はもう二度と絶やさせてはならない。

二人の金剛身よりも固い決意は今も変わらずにいた。

第八話

「ふぅ……もうこんな時間ですのね」
「今日も深夜まで帰れそうにないな……」
寿々花が執務室の壁に架けられた時計に目をやり呟くと、真希は目頭を押さえながらぼやいた。
外はすっかり闇に包まれ、時計の短針は11時を指していた。
真希と寿々花のデスクの上には今日中に終わるのかどうか怪しい程の量の書類が積まれていた。
親衛隊の仕事は紫の警護と荒魂退治だけではない。
出現した荒魂による人的被害や物的被害、任務に当たった部隊の編成などの任務の報告書をまとめなければならない。
さらに政府高官や警察関係者との面談など国家公務員の刀使とはいえ、とても未成年の少女が行う仕事の量とは思えないほどの業務をこなしてた。
「まったく……仕事とはいえ、睡眠不足は避けたいところですのに」
「御前試合も近いせいか、書類仕事も量を増している。藍華は大丈夫だろうか……。書

類仕事が無ければ同行したかったが」
「過保護すぎますわよ、真希さん？藍華さんも数をこなして、紫様から一人で部下を率いて任務にあたる許可が出たではありませんか」
　まるで独り立ちした子供を心配する夫婦のような会話をしている寿々花の背後から影が忍び寄る。その影は彼女の両肩に両手を伸ばす。
「ほら、無事に帰ってきましたわ。藍華さん？やはり貴女のお家には窓から帰宅する風習があるのではなくて？」
「アレー？完璧に忍び寄れたと思ったのに……」
　寿々花の背後には巨大なイチゴ大福ネコの被り物をした藍華がいた。
　表情は見えなくとも、残念がる顔をしているのは声のトーンで分かる。
「藍華……今度はなんの真似だい……？」
「いやぁ、寿々花さん達を少しだけびっくりさせようかなぁって。でも大丈夫。ちゃんと任務のことは紫様に報告済みですから！」
　真希にサムズアップして被り物を脱ぐと、彼女のデスク同様に書類が山積みされた自分のデスクに腰掛ける。
「真希さんったら藍華さんを心配してましたのよ？」
「はい。二人の話は聞いていましたから」

「心配するさ。前の任務では怪我をしていたじゃないか」
以前に紫から見せてもらった報告書通り、藍華は自分より他人の安全を優先する節があった。前の任務では荒魂に写シを剥がされ意識を失った部下を庇い、左腕に荒魂の牙による深い咬傷を負ったのだ。
藍華の体質なのか怪我はすぐに軽快したが、真希と寿々花から大目玉を食らった。
「うう……思い出させないでください……」
「いや、思い出した方がいい。前にも言ったが、君の身体が自分だけの物じゃないと肝に命じていて欲しい」
「自分の身があってこそ、他人の身を守れるのですから」
「はい。でも大丈夫です！結構丈夫ですから！」
「（大丈夫……ですか……）」
藍華の口癖である《大丈夫》
その言葉は周りの人間を安心させると同時に、藍華自身への心配を強める言葉でもある。
藍華の部下の刀使達は厚い信頼を寄せているが、彼女のことが心配で仕方がなかった。本人に「無茶をしないでください」と伝えても「大丈夫！」の一言と笑顔とサムズアップが返ってくるだけであった。

真希達に藍華が心配だと相談する者は少なくなかった。「藍華様に私たちの為に無茶をしないよう伝えてください」と。

「(藍華さん……一体何が貴女をそうさせますの?)」

「寿々花さん?どうかしました?」

「いえ、なんでもありませんわ。それより、いよいよ御前試合が来週に開かれますわね」

毎年に伍箇伝の各校の学内選抜試合で勝ち進んだ刀使達が、折神家に集まり試合を行う。勝ち進んだ2名が折神紫の前で決勝を行うのだ

「うえ?もうそんな時期なんですか?」

「藍華……。以前に御前試合では会場の警備にあたるよう僕が伝えたじゃないか……」

「あ……。すいません」

「予定通りに行われますわよ?大太刀使いの刀使の方が盛大に破壊した床は修復できたようですし」

「えっと……そういえば!真希さんは二回連続優勝して、寿々花さんは二回連続で準優勝だったんですね!いやー、テレビで観てましたけど手に汗握る試合でしたー!」

真希との試合で練武場の床を微塵丸で破壊したのを思い出した藍華は、気まずくなり話題を逸らした。

「ありがとう。でも僕はまだまだ未熟さ。腕を磨き続けて、さらなる強さを得ないと」

「あら？そんな未熟な貴女に私は二度も敗れましたの？」
「いや、寿々花は強いさ。その強さに物事を俯瞰で見れる柔軟さがある。君が第二席で良かったと心から思っている」
「ッ……！褒めても何も出ませんわよ」
　謙遜する真希に少し意地悪な言葉を投げかけた寿々花だが、彼女の真っ直ぐな称賛に思わず顔を赤くしてしまう。
「真希さんは寿々花さんの事を信頼してるんですね」
「ああ。親衛隊が結成して間もない頃、僕に大切なことに気づかせてくれたよ」
「大切なこと？」
「適材適所さ。それぞれの能力を最大限に発揮できる役を担うことで紫様のお役に立てれば良いってね」
　真希は親衛隊とはいかなる状況でも対処できる精鋭でなければならないと考えていた時期があり、まだ中等部に上がったばかりの結芽にも強く叱咤していた。その考えを改めさせてくれたのが寿々花の言葉だったのだ。
「（もう！聞いていて恥ずかしくなることを……！）」
　真希が思い出話をしている間、ずっと寿々花はリンゴのように赤くなった顔を隠すように書類に目を通していた。

「適材適所……か。真希さん、私の親衛隊での役割って何ですか？」
「そうだな……。君の笑顔にはみんな元気付けられている。僕も寿々花も夜見も結芽も、そして君に助けられた人々もね」
「藍華さんの笑顔は自然にこちらも笑顔になります。貴女が第五席となってから、笑顔になる機会も増えましたもの」
「藍華。君はその笑顔で僕たちを照らす光でいて欲しい」
「みんなを照らす光……か」
荒魂からみんなの笑顔を守る為に刀使となった藍華だが、自分を光と称してくれたのは真希が初めてだった。
そして彼女は決心した。自分を認めてくれた紫と真希達を、人々を照らす光となると。彼女達の笑顔を必ず守ろうと。
「はい！親衛隊第五席！剣崎藍華！みんなを照らす光で！笑顔の守り人です！」
藍華は何度も見ても心に安堵感が流れ込み、自然とこちらも笑顔となるとびっきりの笑顔とサムズアップを真希と寿々花に見せる。
「ふふっ。では、書類業務に励んでくださいね？笑顔の守り人様？」
「あ……すっかり忘れてた……。ちなみに明日やるのは……」
「駄目だ」

「（だいじょーぶ……ねむくなーい……つらくなーい……）」
笑顔の守り人は睡魔と死闘を繰り広げながら書類業務に励んだ。
終わる頃には朝日が窓から差し込んでいた。

第九話

「千里先生？どうかな……？」

藍華は自室にて千里とテレビ通話をしているＰＣの前に、五つの毛糸で作られた手のひらサイズの苺大福ネコを並べて不安そうに感想を聞く。

普通の苺大福ネコとは違ってそれぞれ毛糸で作った髪の毛が付けられており、真希や寿々花、夜見に結芽、そして藍華自身の髪の特徴をうまく再現されている。

一言で説明するなら《イチゴ大福ネコ化した折神親衛隊》とでも言おうか

「うん！すっごく可愛い！親衛隊のみんなも絶対喜ぶわぁ」

「やったぁ！あおぞらにいた頃に培った手芸スキルは伊達じゃない！」

「ふふ…さすが私から手ほどきを受けた藍華ちゃんだわぁ」

藍華はこう見えて手先が器用で、あおぞら時代の家庭科の手芸の授業ではクラス内で一目置かれていたのだ。あおぞら卒業式ではクラスメイト全員分の毛糸の苺大福ネコをプレゼントした事もあった

「あと千里先生！明日の御前試合で会場の警護を任せられたんだ！先生はもちろん来るんだよね？」

「えぇ、毎年見に行ってるから。試合はもちろん、藍華ちゃんの親衛隊服姿が楽しみ」
「ふふん。カッコイイから期待しててね？」
　まるで明日は我が子の晴れ舞台を楽しみにしている母親のように千里は微笑む。
「ねぇ……藍華ちゃん？お仕事で困ってることはある？」
「ん？どうしたの急に？」
「深い意味はないんだけど……貴女は昔から辛い時でも大丈夫って言うでしょ？だから……少し心配なの。親衛隊になってからお仕事が辛いとか無い？」
「うーん……。偉い人と面談したり、報告書をまとめるのが夜遅くまで続いちゃったりするけど大丈夫！みんなの為だから！」
「藍華ちゃん……」
　藍華のトレードマークである笑顔とサムズアップを千里に見せるが、千里の表情は晴れない。
　人は精神を磨耗すれば愚痴を吐いたり、怒ったり、泣いたり、何かしらのシグナルが現れるものだ。
　だが藍華にはそれが無い。痛みも苦しみも全て笑顔で隠してしまうのだ。
　何かの拍子で彼女の笑顔が消え失せてしまうのでは無いかと、千里は不安で仕方がなかった。

「本当に大丈夫！だから千里先生……安心して？」
「わかったわ……。じゃあ、おやすみ」
「うん。おやすみ！」
藍華はマウスを動かしカーソルをバツ印に合わせクリックし、通話を閉じた
「千里先生……。どうしたら安心してもらえるんだろう」
藍華は千里が心配そうにしていた事が気がかりだった。
確かに辛いことや苦しいことを口にするのも必要だと彼女は理解している。
だが荒魂を斬り祓ってみんなの笑顔を守る為に刀使となった彼女は、自分が愚痴を吐いたり、泣いている場合ではないと思っていた。
「（泣いていたら……誰かを守れないから。もう……私みたいな子を増やさないように）」
荒魂に家族を奪われ、あおぞらに入所する事になった子供達はみんな泣いていた。
『お母さん』『お父さん』と涙を流し嗚咽を漏らしながら何度もそう呟いていた。
藍華はそんな子供達を笑顔にしようと必死になった。お手玉や手品、夜見や寿々花にしたように被り物や着ぐるみを着て踊った。
そして笑ってくれた子達を見て決意した。この笑顔を守る為に刀使になろうと。もう誰かが涙を流さなくていいように

「んー……まあ多分大丈夫！明日は早起きしなくちゃだし、寝ないとね」

午前6時頃。藍華は折神家敷地内にある祭殿へ向かう祭殿は山の中にあり、あたりには霧が立ち込めていた。

「おはよう、藍華」

「おはようございます、藍華さん」

「おはようございます、剣崎さん」

「藍華お姉さん！おはよー！」

真希達は藍華に笑顔で挨拶をする。夜見は相変わらず無表情だが

「おはよう！紫様は？」

「祭殿の中で珠鎮めのお務め中ですわ」

珠鎮めはノロが結合し荒魂となるのを防ぐ為に鎮めることである。

ノロは負の神性を帯びており消滅させることは不可能である。そこでノロは古来から小分けにされ、各地の社に奉納され鎮められてきた。

ノロの大半は折神家が請け負っており、それを沈めるのも折神紫の務めである。

「真希さん達は祭殿の中に入ったことあるの？」

「いいや。そもそも祭殿には紫様以外の人間は立ち入ってはならないんだ」

「へぇ～……ちょっとだけ見てきちゃダメ？」
「藍華さんが私たちに拘束されて良いのなら」
「嘘です、ごめんなさい」
　険しい表情で寿々花がそう言うと、藍華は即座に謝罪した。
「あっ！そうだ！みんなにプレゼントがあって！」
「新しい名刺でも出来たの？」
「ちがうよー。ジャジャーン！」
　古臭い効果音を声高らかに口にすると、ポケットから昨夜作ったイチゴ大福ネコのキーホルダーを取り出した。
「おー！イチゴ大福ネコ！その髪……ひょっとして私!?」
「これの三つ編みがあるのが僕か。上手く出来ているな……」
「赤毛の子が私ですか。フフッ、可愛らしいですわね」
「白と黒の髪は私ですか」
「うん！それでこの子は私！親衛隊がイチゴ大福ネコになっちゃった！」
　喜んでくれるか不安だったが杞憂だったようだ。真希達は自分達を模したイチゴ大福ネコに興味津々の様子だ。真希達は微笑みながらイチゴ大福ネコを眺めている
「ありがとう藍華お姉さん！大切にするね！」

「ありがとう藍華。大切にさせてもらうよ」
「ええ。私も大切にさせていただきますわ」
「ありがたく頂戴致します」
「どういたしまして。みんなが喜んでくれて私も嬉しい！」
藍華は４人が喜んで受け取ってくれたことに感激し、溢れんばかりの笑顔とサムズアップを見せた。
「見て見て！私のイチゴ大福ネコに友達が出来たよー！」
「おー！仲良しだね！」
結芽は藍華から受け取ったイチゴ大福ネコをニッカリ青江の鞘に取り付ける。既に付けてあったキーホルダーと並び、まるで頬を合わせて戯れあっているように見える
「２人とも。紫様がお戻りになられましたわよ」
珠鎮めを終えた装束姿の紫が階段をゆっくりと下っており、その姿は威厳に満ち溢れている。
真希達は紫を出迎える為に横一列に並ぶと、深々とお辞儀をする。
「珠鎮めお疲れ様でした。本日の大会は決勝のみ紫様にご上覧いただきます。僕と寿々花と結芽、藍華は会場の警備。夜見は紫様の護衛につきます」

「いよいよ御前試合！どんな人達の戦えるんだろ！楽しみだよー！」
「折神紫……貴様は……私が必ず！」
「初の大仕事！無事に済ませたら千里先生も安心するはず！」
御前試合に心を躍らせる美濃関学園の刀使
母の無念を晴らす為に御前試合に挑む平城学館の刀使
恩師に胸を撫で下ろしてもらう為に務めに張り切る親衛隊第五席
３人が交差する時、物語は動き出す

胎動編
第十話

　御前試合当日。以前、藍華と真希が試合を行なった練武場の客席は五箇伝の生徒たちやＴＶ局のクルー達で埋め尽くされていた。
　それぞれの学園代表の刀使を応援する応援幕が客席から垂れ下がり、ダックアウトには選抜メンバーである刀使たちが待機している
　素振りをする刀使もいれば、目を閉じて瞑想している刀使もいた。
「うわぉ……みんな強そう…」
　藍華は真希と寿々花と共に北側の客席で練武場内の様子を見ていた
「今年の出場者は中等部の年少者が多いみたいですわね」
「御刀との相性は年少時の方が高いともいうし、次世代になったのさ」
「前世代は大会二連覇の獅童さんが終わらせたとでも?」
「僕はそれほど自惚れじゃないよ」
　そう言い放つと、後ろで退屈そうに藍華から貰ったイチゴ大福ネコを眺めている結芽に目をやる。

真希は自身より高みにいる結芽に少しでも近づこうとしていた。自惚れず高みを目指す。その心構えがあって彼女は大会二連覇を成し遂げ、最初の親衛隊となれたのだ

「むしろ結芽を見て、そう感じるのさ」

「真希さん、カッコいいです」

「そんなことはないさ。僕はただ……」

「謙遜しないでください。前も言いましたが、驕らずに高みを目指すのはカッコいいです！私は結芽ちゃんや真希さん達より弱いけど、真希さんが強くなるために協力します！」

「藍華……ありがとう……。（彼女もまた……僕が目指すべき刀使の一人なのかもな……）」

真希は真っ直ぐな心と誰にでも手を差し伸べる優しさを併せ持つ藍華を見て、彼女のように皆を照らす光を持てないかと考えた。

「あら？流石は真希さん。おモテになりますわね？」

「す、寿々花？いきなりどうしたんだい？」

「いいえ、お気になさらずに」

つまらなさそうにそう言うとそっぽを向く。なぜ寿々花が不機嫌になったのかは真希には恐らく気づかないだろう。

「藍華お姉さーん。お客さんだよー」
「え？」
背後から結芽の声が聞こえてそちらに向くと、千里がひらひらと笑顔で手を振っていた。グレーニットに膝までの長さがあるグレーのスカート姿で、左胸には刀使以外の観客が身に付ける入館許可証を付けていた。
「千里先生ー！」
藍華は笑顔で千里に走り寄ると千里に抱きついた。千里は抱きしめ返し、藍華の頭を優しく撫でる。
「来てくれたんだね！」
「もちろんよー。親衛隊服、すっごく似合ってるわぁ」
「えへへ……」
「（いいな……私もママに見捨てられなかったら……）」
千里の照れくさい言葉に藍華は頬を赤らめながら微笑む隣で、結芽は少し悲しそうな表情を浮かべる。
実の母と子のような関係を見て、彼女はぼんやりと頭の中でそんな仮定を考えていた。
結芽はまだまだ両親の愛情を注がれる年齢だ。藍華と千里の親子のような関係性を

目の当たりにした彼女は、両親に見放されたという目を背けたくなる事実を嫌でも思い出させられる。
「結芽ちゃん?」
「ん……なんでもないよ。えっと……榊先生だよね?初めまして」
「初めまして。藍華がお世話になっております」
「いえ、藍華にはいつも助けられています」
結芽達が千里に挨拶と会釈をすると、千里は挨拶と会釈を返した。
真希達は千里とは初対面だが、あおぞらの存在は知っていた。折神家に所属する刀使の中にはあおぞら出身の者が何名かおり、彼女達からあおぞらの事は聞いていたのだった。
「あら?それ、藍華ちゃんが作ったイチゴ大福ネコね?貰ってくれてありがとう」
千里は結芽の先程弄っていたイチゴ大福ネコに気づき、彼女に感謝の言葉を述べた。
「う…うん」
結芽は藍華の母同然の存在である千里に、どう接すれば良いかわからず生返事を返す。
『これより第一回戦を開始します』
「あら、じゃあ私は客席に戻るわね?」

「えー、千里先生も一緒に見ようよー」
「藍華。僕たちが試合を観戦するこの客席は、本来親衛隊以外の人は入れないんだ。あまり、長居するのも周りからよろしくないだろうしね」
「うー……」
　まるで我儘を言う結芽のように頬を膨らませる藍華を見て、千里はふふっと笑うと彼女の頭を撫でた。
「大丈夫よ。お仕事が終わったら、たくさんお話ししましょうね？」
「……うん。じゃあ、後でね！」
　千里は連絡通路に繋がる扉から客席へと戻った。
　藍華は真希と寿々花と共に試合観戦に戻ろうとするが、結芽は再び壁にもたれかかりイチゴ大福ネコを弄り始めた。
「結芽ちゃんは見ないの？試合」
「うん……どうせ私より弱いんだし」
「ふーん……じゃあ、私いくね？」
　藍華は真希達の元へ戻ると、平城学館と綾小路武芸学舎の刀使の試合が始まろうとしていた。
『平城学館、十条姫和！綾小路武芸学舎、山崎穂積！前へ！』

「私と藍華さんの後輩と真希さんの後輩との一戦ですわね」
審判の合図と共に双方の刀使は礼をし、御刀を抜き正眼構えをとり写シを張る。
「始め!」
試合開始の合図とほぼ同時に、姫和迅移を使い穂積の懐へ飛び込み胴に目掛けて一閃を放つ。
迅移は波の刀使のものより遥かに速く、その一閃は反応が遅れた綾小路の刀使の胴を切り裂き写シを剥がさせ、地に伏せさせた。
「うえ!?今の見えました!?」
「ええ……あの迅移……ここまで勝ち残っただけはありますわね」
「ああ。あの速さでは相手が反応できなかったのは無理もないな」
狼狽る藍華とは反対に、冷静に姫和の実力に感心していた。
その後も試合は続き、出場者達は譲れぬ想いを胸に手に汗握る戦いを繰り広げた。
そして準決勝が終わり、決勝まで勝ち進んだ刀使は美濃関女学院の衛藤可奈美と平城学館の十条姫和の二名となった。
決勝は午後に行われるため、昼休憩を挟むことになっていた。
会場近くにある公園や広場では試合観戦に来た刀使達がレジャーシートを広げて昼

食を楽しんでいた。
　大会出場者と観戦に来た刀使達には豪華な弁当が配られ、刀使達は舌鼓を打っていた。
　そこにはクラスメイト達と昼食をとっている可奈美と舞依の姿もあった
「美味しい！何個でも食べられちゃう！」
「たくさん食べて。午後から決勝が待ってるんだから」
「ほひほひー」
　舞依は弁当にがっついている可奈美に茶が入ったカップを渡す。
「可奈美ー、がっつきすぎだってばー」
「だって美味しんだもん……あれ？」
　膝下に何かがぶつかる感触がし、膝下に目をやるとサランラップで包まれたおむすびがあった。可奈美はそれを拾い上げる
「おむすび？」
「あーごめん！それ私のなんだ」
「貴女は……親衛隊の方ですか？」
「はぁ……はぁ……は、はい！私、こういう者です！」
　息を切らして可奈美達の元へ駆け寄ってきた藍華に、舞依はそう問うと藍華は笑顔で

挨拶すると舞依達へ名刺を渡した。
「みんなの笑顔を守ります。親衛隊第五席……剣崎藍華……さん？」
「はい！」
「すごい！流派は!?その御刀はなんて言うんですか!?」
舞依とクラスメイトはユニークな名刺を見て苦笑いを浮かべているが、可奈美は目をキラキラさせて藍華に詰め寄った。
数少ないエリートしかなれない折神親衛隊の一人と聞いて、テンションが最高潮まで高まっている様子だった
「衛藤さんと柳瀬さんだよね？準決勝みてたよ！二人とも凄かったよ！」
「あ……ありがとうございます」
「ありがとうございます！」
藍華はトレードマークである笑顔とサムズアップを見せて、二人の健闘を称えた。
「どうして親衛隊の人がここに？」
「あーや……そのおむすびなんだけどさ……」
「夜見さんはまだ紫様のとこ？」
「ああ。紫様が決勝戦をご覧になるときには合流できるさ」

数分前、藍華は真希達と共に軽く昼食を済ませようと夜見が作り置きしていたおむすびを食べていた。
藍華もおむすびを取り出しサランラップを剥がそうとしたとき、黒い影が目の前に通り過ぎたと同時におむすびが消えたのだ
「……あれ？」
「藍華お姉さん、アレ」
結芽が空を指差すと、そこにはおむすびをくわえたカラスが飛んでいた
「あーー！おむすび泥棒ー！」
「ちょっと藍華さん!?」
藍華はその場から飛び出し、おむすび泥棒のカラスを追いかけて行った

「という訳で……」
「へ……へぇ～……」
親衛隊第五席がおむすび泥棒のカラスを追いかけていたと言うシュールな出来事を聞いた可奈美達は苦笑いを浮かべる他なかった。
「じゃあ、はい」
「ありがとう！じゃあ、私は行くね？決勝頑張ってねー！」

「はい！ありがとうございます！」
藍華は可奈美からおむすびを受け取ると、真希達の元へと戻って行った。
「なんか不思議な人だったね」
「あー……流派と御刀の名前聞きそびれちゃったぁ……。もしからしたら手合わせしてくれたかも」
「可奈美ー……決勝戦あるんだからね？」

決勝戦が始まる時間となり、会場内の客席は刀使達で埋め尽くされていた。紫が腰掛ける玉座の両隣には親衛隊達が両隣に凛とした表情し佇んでいた
「（ついに現れたか……折神紫！）」
「（ついに十条姫和ちゃんと戦える！ワクワクが止まらない！）」
『これより折神家御前試合決勝戦を行います！両者！礼！』
「（衛藤さん……姫和さん……二人とも頑張れ！）
」
可奈美と姫和は審判の合図と共に礼をし、御刀を抜き写シを張る
ついに始まる決勝戦に藍華と会場内の刀使達は固唾を飲む
『始め！』

先に動いたのは姫和だった。
姫和がいた場所には迅移による激しい土煙が巻き上がる。その次の瞬間、藍華の隣で剣戟音が鳴り響き風圧が彼女の髪を靡かせた。
「……え?」
藍華は一瞬状況が理解できなかった。紫の玉座は切り裂かれ、彼女の手には童子切安綱・大包平が握られていた。
その光景を見て状況を理解した。姫和が紫に斬りかかったのだ
「それがお前の《一の太刀》か?」
「チッ!」

姫和は崩された構えを整えて、再び紫に斬りかかる。
しかし、迅移で姫和の背後に回った真希は彼女の左胸を容赦なく御刀の薄緑で貫き写シを剥がさせた。
意識を飛びそうになる感覚に襲われた姫和はその場で膝をつくと、真希は容赦なく薄緑を彼女に振り下ろす。
「真希さん!ダメェ!」
藍華は迅移で真希の正面に近づき、微塵丸を抜き薄緑を切り払った。

「藍華!?」
紫を守る立場にある親衛隊第五席である藍華にトドメの邪魔をされた真希は困惑し、激しい痺れが走った左腕を押さえる。
その隙に可奈美が迅移で姫和の元へ駆けつけ、姫和の手を掴んだ
「迅移！」
「クッ！」
可奈美がそう叫ぶと、２人は迅移でその場を脱し正門を飛び越え会場外へと逃げ去った。
「なにがどうなってんの!?」
「なんで可奈美が!?」
会場内はパニックに陥り、警備員達は可奈美達の追撃班の手配を要請していた。
「(衛藤さん……なんで……)」
決勝戦で起こった折神紫暗殺未遂事件。藍華は胸騒ぎが止まらなかった。
紫様が目の前で狙われたこと。知り合って間もないとはいえ、可奈美が紫を暗殺しようとした姫和を助けたこと。
そして……あの時真希は……写シの無い姫和を容赦なく斬ろうとしたことに

第十一話

『ただいま敷地内から出ることは禁じられています。各学園の生徒ごとに集合し、待機するようお願い致します』

折神家本部の敷地内出入口には機動隊に警備にあたる刀使によって封鎖され、そこにはマスコミ達が集まっていた。

パトカーのサイレンが鳴り響き、警官達は紫を襲撃した可奈美と姫和の服装や特徴を無線で他の警官達に報告している。

御前試合会場も刀使達は紫様が襲撃されるという異常事態に困惑しながらも、学園ごとに別れ集まっていた。

紫は執務室に戻り、真希達は荒魂討伐などの任務の際に使われる作戦指揮室にて待機していた。

部屋には数十台のコンピューターに、壁に掛けられた巨大なモニターには折神家本部周辺の監視カメラの映像が映し出され一定間隔で切り替わる。

「藍華！アレはなんの真似だ！」

「あの時、あの子は写シが剥がれていました！でも真希さんはあの子を斬ろうと！」

「紫様をお守りして逆賊を排除するのは親衛隊の務めだ！君は逆賊の幇助をしたんだぞ！」
「私は必要以上に人を傷つけて欲しくなかっただけです！」
「そんな生温い考えで紫様をお守りできるのか！」
藍華の妨害により、紫の暗殺を企てた反逆者達を捕らえ損ねた真希は怒り心頭な様子で藍華に叱咤する。しかし、藍華は一歩も譲らずに反論を続ける。
「いい加減に……！」
「お二人とも、ここは作戦司令室ですわよ？少しは落ち着きなさいな」
二人の間に割って入り、寿々花は藍華達をなだめる。あのまま口論を続けていては、オペレーター達のサポートの妨げになるのは目に見えていたからだ。
「ですが藍華さん？貴女は真希さんの妨害をし、逆賊を逃した。これは紛れもない事実ですわ。貴女はこの責任をどう取るおつもりですの？」
寿々花は怒りに満ちた瞳を藍華に向け、彼女にそう問う。
紫を守護する親衛隊。その一人が逆賊達の手助けをした。これはその場で拘束されても文句は言えない状況だ。
だが、そうされないのは真希達の情けがあってこそだと藍華は理解している。
「……私が二人を捕まえます！私に捜索許可を！」

藍華は自身が親衛隊第五席だということを忘れてはいない。真希達とはやり方は違えど、逆賊達を捕らえたいという気持ちが彼女にはあった

「……少し待て」

真希は上着のポケットから携帯端末を取り出し、紫と連絡を取る。

親衛隊が動くには折神紫の許可なしでは許されないからだ。

「はい、承知いたしました。紫様から許可が出た。警備隊を率いて逆賊達の捜索に当たってくれ」

「はい！」

「それと約束してほしいことがある。もし抵抗すれば、容赦なく斬ると」

「……善処します」

藍華はハッキリしない返答を残し、作戦司令室を後にした

「大丈夫……と言いませんでしたわね」

「……ああ」

寿々花の言葉に真希はため息混じりの返事を返した。

藍華の口癖である《大丈夫》

彼女と同じ親衛隊の仲間として数ヶ月間共に過ごしてきた真希達は、その言葉を聞かなかった日は全くと言っていいほど無かった。

「なぜ紫様は藍華さんを親衛隊にスカウトしたのでしょうか。親衛隊たるもの、紫様のご判断に疑いを持ってはならないのは理解してはいますが」

親衛隊の責務は荒魂から人々を守るだけではない。荒魂、人間問わず紫に仇なす者を排除することも含まれる。

真希と寿々花は公務の為に移動する紫を襲撃した逆賊を何人も拘束し、必要ならば危害を加えるのも厭わなかった。

だが藍華は違う。たとえ悪党であろうと彼女にとって人を傷つける事は強く拒む。

真希達は、藍華のその生温いポリシーに嫌悪感を抱いていた

「それは僕たちが考える事じゃないよ。今必要なのは、彼女の生温い考えを捨てさせられるかだ」

藍華は沈んだ表情をしながらエントランス前のベンチに腰掛けていた。

「(逆賊を幇助した……か)」

あの時の真希の言葉が胸に突き刺さり、自身の行動が間違っていたのではないかと疑いを持ち始めた。

「(でも……人を傷つけちゃいけないよ。相手も私たちと同じ人間なんだから)」

人語を理解せず対話ができない荒魂を斬ることはできるが、自分と同じ対話ができ、

赤い血が流れる人間となれば話は違う。
悪人であれば斬り捨てる。藍華はそう簡単には割り切ることができなかった。
あの暗殺未遂も何か悲しい行き違いがあったのではないかとさえ考えてしまうのだ。
「落ち込んでいても始まらない！さて！衛藤さんと十条さんの捜索に行かないと！」
自分の両頬をパチンと強く叩き、ベンチから立ち上がる。
すると、聞き慣れた声が聞こえた。
「藍華ちゃん」
「千里先生！」
声が聞こえた方に目をやると、そこには千里がいた。藍華は溢れんばかりの笑顔で彼女に抱きつく。
だが、いつものように藍華の頭を撫でる様子はない。藍華は顔を見上げると千里の曇った表情が見えた
「藍華ちゃん……大丈夫だった？」
「うん。ちょっと怒られただけだから心配しないで」
「大丈夫……って言わないの？」
「あっ……。もう、意地悪だなぁ……」
千里は藍華が落ち込んでいるのをすぐに見破った。長年あおぞらで藍華を見てきた

千里には容易かった。
「ねぇ千里先生？千里先生は……悪い人なら簡単に傷つけていいと思う？」
その質問を聞いて何があったのかは千里はすぐに予想できた。
人を傷つけることを激しく嫌う藍華のポリシーを否定され、それが揺らぎつつあると。
彼女も客席から紫暗殺未遂の一部始終を見ていた。藍華が真希の刃を弾き、犯人達を捕らえ損ねたところも
「確かに藍華ちゃんは親衛隊第五席の刀使で、紫様をお守りするのが藍華ちゃんの責務。真希さん達が怒るのも無理はないわ」
「うん……」
「でも、真希さん達に怒られて考えを曲げるつもりは？」
「ないよ。相手も私たちと同じ人間だから。生温くても、これが私だから」
藍華は千里の目を見てハッキリとそう答えた。すると、千里は微笑む
「じゃあ、藍華ちゃんは藍華ちゃんのやり方を貫きなさいな。藍華ちゃんなら大丈夫よ」
「……うん！」
千里は微笑みながら藍華にサムズアップを見せると、藍華も笑顔でサムズアップを返す。

「じゃあ千里先生、行ってくるね？」
「ええ、いってらっしゃい」
　千里はエントランスの出口へ駆けていく藍華を見送った。大切な教え子の幸を願いながら

「可奈美の居場所が分かったァ!?」
「希（のぞみ）先輩！声が大きいです！」
　舞依に希先輩と呼ばれた中性顔で夕焼けのようなオレンジ色で、背中まで届くほどの長い髪と、エメラルドグリーンの瞳を持つ美濃関の制服姿の刀使は焦った様子で両手で口を塞ぎ、辺りを見回す。誰かが自分達の会話が聞こえた様子はない様だった。
　二人はエントランスと二階の廊下に繋がる階段前に設置されている自動販売機の影にしゃがみ込んでいる。
「でも、なんで分かったんだ？」
「電話が切れる前に、夕方になると流れる放送が聞こえたの。あの放送が流れる場所はだいたい分かってるから」
「よっしゃ！じゃあ、早く行こう！舞依！この望月希先輩に続け！待ってろ！我が可愛い後輩の可奈美ー！」

希はまるでスタートの合図を聞いた陸上選手のように、スタートダッシュを決めてエントランスの出口へと駆けて行った。
「待って希先輩！羽島学長に許可を貰わなきゃ！希先輩ー！」
舞依は慌てて希を追いかけて行った。
新たに現れた美濃関学院の刀使、望月希。
彼女もまた藍華の運命を大きく変える一人となる

第十二話

「んー……意気込んだのはいいけど……どこ探そうかな……」

藍華は駐車場に停めてあった自身のバイクにまたがり、頭を悩ませていた。

既に折神家本部周辺には検問が張り巡らされ、大規模の警備隊や刀使の巡回が行われている。

そこに一人の刀使が加わったところで殆ど変わらないどころか、下手をすれば邪魔になりかねない。しかし、より遠くへ聞き込みをしようにも当てなんてない。

「うーん……ん？」

バイクのエンジンが鳴らす重低音が聞こえ、藍華は顔を上げる。

目の前に真っ赤な低い車高に長いホイールベースが特徴であるクルーザーが現た。

そこには希が跨っており、後ろには舞依を乗せていた。

「あれって…柳瀬ちゃん？」

「ごめんなさい希先輩…巻き込んじゃって…」

「バカ言え。大切な幼なじみの妹分がピンチなんだ。はやく可奈美のとこへ行くぞ」

「可奈美って……。すいませーん！」

藍華はバイクを押しながら舞依たちを呼び止めると、彼女達は藍華の方へ振り向いた。
「(あの服!親衛隊じゃないか!)」
「あっ!剣崎さん!?」
「いきなりごめんね?衛藤さんの居場所を知ってるの?」
「いや、なんでもありませんから。それじゃ!」
親衛隊の刀使に可奈美の居場所を知っていると知られたら、ついて来るに決まっている。そして折神紫を暗殺しようとした平城学館の刀使と一緒に拘束しようとするだろう。
そう確信した希はバツが悪そうな表情をし、話を切り上げようとする。
「待って!」
「わわっ!」
舞依はバイクスタンドを足で降ろし強引にバイクを止めると、バランスを崩しかけた希は両足を地面につける。
「なにすんだよ!?」
「ごめんなさい。この人なら大丈夫かもしれないから……」
「でも親衛隊だろ?もし問答無用で可奈美ごと取り押さえられたりしたら…」

「えーっと……二人とも?」
藍華は自身に背後を向けてヒソヒソ話をしている舞依達に声をかけると、再び彼女達は振り向いた。
「はぁ……アタシは望月希。美濃関学院高等部二年の刀使だ。よろしくな」
「希さんだね、よろしく。私はこういう者です!」
ため息混じりに自己紹介をし、握手をしようと右手を伸ばすと藍華は希の右手を掴み握手をすると、胸ポケットから名刺を渡す。
「みんなの笑顔を守ります……か。いい名刺だな」
「うん!ありがとう!」
「(悪い人じゃなさそうだな。舞依の言う通りこの人なら……)」
名刺を褒めてくれた事に感激して笑顔で再び握手をしてきた藍華を見て、希は彼女なら事情を話せば可奈美は見逃してくれるかもしれない。
そう考えた希は舞依に目を向けて静かに頷いた。
「剣崎さん。私たちと一緒に可奈美ちゃんを探してください」
舞依はそう言って藍華に頭を下げた。
まるで姉妹のように美濃関学院で共に学校生活を過ごし、試合や任務ではお互いを高め合った可奈美が折神紫の暗殺を目論んだ刀使と共に囚われるかもしれない。

そんな今にも不安に押し潰されてしまいそうな舞依の心情を藍華は全てでは無いが察した。

「可奈美ちゃんがなんであの子の手助けをしたのか分かりません。でも、何か事情があるはずなんです。だから……」

「……うん。大丈夫」

「え？」

藍華は舞依の肩を軽く叩くといつもの口癖である《大丈夫》と呟いた。

舞依は少し困惑気味で頭を上げた。彼女は折神紫を守護する親衛隊の第五席だ。そんな彼女が直ぐに同意するとは思わなかったからだ。

「辛いよね、大切な人が大変な状況になっちゃうのって。私も何か行き違いとかあるんじゃないかなって思ってるんだ」

「なんでそう思うんだ？ 頼んでる立場の人間が言うのはおかしいが、アンタは親衛隊なんだろ？ 普通なら問答無用で捕まえるもんだろうに」

希は藍華にそう問うと、藍華は真面目で真っ直ぐな眼を向けて答えた

「だって……相手も同じ人間だから。ただの衝動や気紛れであんなことをする人はいないと思うし、きっと何か訳があるはずなんだ。だから手伝うよ！ 衛藤ちゃんを探すのを！」

「剣崎さん……」
「じゃ、決まりだな。だいぶ話し込んだから急がないと」
希はヘルメットを舞依に渡すと、バイクスタンドを脚で蹴り上げエンジンをかける。舞依は受け取ったヘルメットを被って希のバイクの後ろに乗る。藍華もヘルメットと普段から首にかけている防塵ゴーグルをつけると、バイクのエンジンをかけた。

「ええ。三時間ほど前にフード付きパーカーとギターケースをお買い上げになりました」
「その後、どの方面に向ったかは分かりますか?」
藍華は東京にあるディスカウントショップの店員に可奈美と姫和の顔写真を渡し、二人の居場所についての聞き込みを行なっていた。
舞依からの話によると可奈美が公衆電話から連絡した際に夕方に流れる町内放送が聞こえ、その放送は東京のこの辺りの地域にしか流れないものらしい。
そして舞依と希、藍華は別れそれぞれ聞き込みをしていたのだ
「いえ……流石にそこまでは」
「分かりました。ご協力ありがとうございました」
藍華は礼の言葉を言うと来店客用の駐車場へ駆けて行った。

店前の電光掲示板には２１時過ぎの時刻が表示され、空には満月が現れており、辺りはすっかり闇に包まれていた。
「もうこんな時間……お腹空いたなぁ……」
そう愚痴を呟きながらバイクに跨ろうとした時、ポケットの携帯電話が振動する。携帯電話を取り出すと画面には《望月希》と表示されていた。希達と別れる前に藍華は二人と携帯番号の交換をしていのだった。
『アタシだ。いま可奈美たちが宿泊してたビジネスホテルにいる』
「うえ!?見つかったの!?」
『いや、部屋はもぬけの殻だった。アタシ達が嗅ぎつけたのを感づかれたっぽいな』
「そっか……あっ！」
昼から何も口にしていない藍華の空腹は既に限界に達し、大きな腹の音が鳴り、それは携帯電話越しに希の耳にもしっかりと届いていた。
「……今日はもう遅い。今いるビジネスホテルに泊まる事にしようか。晩飯を買ってきといてやるから、合流してくれな」
「は……は～い……」
赤面しながら携帯電話の通話終了ボタンをタップし、急いで希達の元へと向った。

「くっはー！生き返ったよー！」
「よく食うなアンタ……」
「ふふ……」
　希達に合流した藍華は二人と共に食事を済ませていた。二人はコンビニで購入した幕内弁当を一つずつ平らげたが、藍華はそれだけじゃ足りず自分で再びおむすびやサンドイッチなどを買い、それらを全て平らげたのだった。
　空になった弁当とおむすびの包み紙の山を希は呆れ顔で見て、舞依は微笑ましそうに藍華を眺めていた。
「なんか、剣崎さんがあの恐ろしい親衛隊の一人なんて思えないな」
「恐ろしい？」
「獅子みたいにおっかない一席にやたら頭が切れる二席、何考えてるか分かんない三席、戦闘狂な四席。そいつらが恐くないと思える刀使がいるなら教えて欲しいよ」
「はい！私は恐くありません！」
　藍華は勢いよく手を挙げると、真希達の意外な一面を話し始めた。
「真希さんはすっごく努力家で今の自分の実力に満足せずに日々頑張ってるし、寿々花さんは厳しい時もあるけど優しくてレンジでチンしたお漬物が好きな意外な一面が可愛らしいし、夜見さんの作ったおむすびと紅茶はとっても美味しくて、結芽ちゃんは素

直でみんなの妹みたいな存在なんだ」
　眼を輝かせながら笑顔でそう話した。数ヶ月という決して長くない時間だが、彼女達と共に過ごした藍華だからこそ理解している彼女達の魅力を希達に話し続けた。
「剣崎さんは親衛隊の皆さんを信頼してるんですね」
「うん！みんな大切な仲間だから」
「そっか。悪かったな、恐ろしいなんて言って」
「大丈夫！真希さんと寿々花さんは怒ると本当に恐いから！」
「おいおい……ふあああ……眠いな……。明日も可奈美達を追いかけないとならないし、そろそろ寝ようか」
　あくびを噛み殺しながら、希はクローゼットから人数分の布団を取り出し、藍華と舞依は小さなテーブルを隅に運んだ。
　敷かれた布団に入った三人は直ぐに眠りに落ちた。可奈美を再び探す明日に備えて

第十三話

「いえ……見覚えはありませんね……」
「分かりました。ご協力ありがとうございました」
１６時ごろの女子中高生達で賑わうアイスクリーム店の店員に藍華は礼を言って頭を下げる
可奈美達が宿泊していたビジネスホテルにて舞依と希と共に休み、再び二手に分かれ聞き込みをしていた。
折神家の警備隊や警官隊達の検問は東京ほぼ全域に設置され、駅や高速バスの乗り場など公共の乗り物へのアクセス手段をほとんど塞いでいた。
だが、可奈美たちは見つからず朝の１２時から始めた聞き込みは４時間ノンストップで進んでいた。
聞き込みを終えた藍華は退店しようと踵を返すと、舞依と希がちょうど入店してきた。
「剣崎さん、どうでした？」
「ううん…そっちは？」

「ダメだ。全部空振りだ」
「そうですか……」
「可奈美ちゃん……」
「はーいはーい！辛気臭い顔すんな！甘いもん食って気分変えようぜ！奢ってやっから！」
藍華と舞依の表情が曇るのを目にした希は両手をバシバシと激しく叩くと、レジ前のアイスやドーナツが収納されたガラス張りのショーケースを眺める。
「店員さん！プレーンシュガードーナツ三つ！舞依と剣崎も頼みな？」
「……はい！ありがとうございます！私はフレンチクルーラーとチョコアイスお願いします！」
「えっと……バニラアイスを……」
二人の勢いに押された舞依は戸惑いながらも無難なバニラアイスを注文した。
注文の品を受け取った三人は窓際にある席へと向かい、舞依は希の隣に腰掛け、藍華は二人の向かい側の椅子へ腰掛けた。
「はぁ～やっぱこれだよなぁ～」
「プレーンシュガーが好きなんですか？他にもチョコドーナツとか苺ドーナツとかあったのに」

藍華は粉砂糖がたっぷり塗されたプレーンシュガードーナツを幸せそうに味わう希にそう質問する。
「ふふん……この飾らず主張し過ぎないコイツが至高なんだよ。俺にとっちゃな」
「希先輩はよく私や可奈美ちゃんに美濃関学院の近くにあるドーナツ店のドーナツをご馳走してくれるんです。希先輩はプレーンシュガーしか食べないみたいで」
「アタシはコイツだけでいいの。よく店長が新商品進めるけど、迷わずプレーンシュガーを選ぶんだ」
そう答えると一つめをペロリと平らげ、二つめを手にとり大きく口を開けて齧り付き幸せそうに口周りについた粉砂糖をテーブルに置かれたおしぼりで拭う。
「(可奈美ちゃん……どこにいるの……?)」
可奈美のことが気が気でない舞依は深刻そうな表情で、オシャレな紙カップに入ったバニラアイスを眺めていた。
「柳瀬さんは優しいね」
「え?」
藍華の言葉を聞いた舞依は顔を上げると、藍華は微笑んでいた
「だってそんなに可奈美ちゃんのことを心配してるんだもん。優しいね、柳瀬さんは」
「……私と可奈美ちゃんは親友同士なんです。剣術のことになると目を輝かせて周りが

見えなくなっちゃうくらい夢中になって…私の手作りクッキーをすごく喜んでくれる…そんな可奈美ちゃんが大好きだから…だから私は……」

膝の上に置かれた両手を握りしめながら舞依は可奈美への想いを口にする。そんな彼女を見て藍華は何度も頷く。

「うん、凄いよ柳瀬さんは。誰かの為に…大切な人のために必死になれる、それは素晴らしいことだよ？だから、私は柳瀬さんを応援するよ。一緒に衛藤さんを見つけよう！」

「剣崎さん……ありがとうございます！」

笑顔でサムズアップをしてくれた藍華に舞依は微笑みながらお礼を言った

舞依は藍華と出会って日が浅かったが、彼女の笑顔と言葉は舞依の心を落ち着かせてくれた。

「あと、ちゃんとアタシも協力するからな。可愛い妹分たちの為なら火の中水の中、荒魂の群れの中だろうが関係ないさ」

「はい、希先輩もありがとうございます！」

「よし！元気が出たんなら、はやくアイス食っちゃえよ？溶けたらもったいないからな」

希の言葉にハッとした舞依はカップに入ったバニラアイスに視線を戻すと、既にほとんど液体と化していた。慌ててスプーンを手に取りバニラアイスを掬おうとした瞬間、藍華達の携帯端末から警告音を思わせる音が鳴り響く

三人は慌てて携帯端末を取り出して画面をタップするとデジタル化したスペクトラムファインダーが起動され、荒魂の出現位置が３Ｄマップ上に表示される

「原宿方面に荒魂!?」

店内でクラスメイトや家族とアイスを楽しんでいた客達も、携帯端末から荒魂出現の通知が送られたのを確認し、ざわざわと穏やかではない雰囲気が広がる。

「舞依！剣崎！行くぞ！」

希はそう言って席から立ち上がると、最後の一つとなったプレーンシュガードーナツを口に押し込む。

藍華と舞依も席を立ち、希と共にバイクを止めてあるコインパーキングへ走った。

空は雲に覆われ雨が降り出す中、荒魂が出現した原宿方面へ向かって藍華達は検問の影響で車が渋滞している道路を車同士の間を縫うようにバイクを走らせる。

歩道には藍華達とは反対方向へ走って荒魂から逃げる民間人達で溢れ、中には車を乗り捨てて逃げる者もいた。

「あそこ！」

藍華達は渋滞を抜けると数十メートル先に小型荒魂の群れを視認する。

大型は見たところは居ないようだが、小型荒魂の中には狼のような荒魂が数体確認で

きる。身体は毛皮の代わりに黒くオレンジ色の線が走る甲殻で覆われ、口には鋭さと頑丈さを兼ね備えた牙が生えていた。
「先手必勝！舞依！掴まれ！」
「えっ!?」
そう叫ぶと希は一気にバイクのスピードを上げて荒魂の群れへ特攻し、藍華も彼女たちに続いてスピードを上げる。
狼型荒魂はヒラリと藍華達の突進を回避するが、鬼の頭に虫のような脚が生えたような外見をした小型荒魂数体はバイク二両に正面衝突した。
小型荒魂は砕けた甲殻の破片とノロの飛沫と共に宙を舞い、地面に叩きつけられ絶命した。
藍華と希はバイクをドリフトターンさせ、荒魂達と対峙する。狼型荒魂は彼女達に唸り声を上げて威嚇し、空に向かって雄叫びを上げる。それを合図に他の荒魂達が藍華達に向かって猛進する。
「二人とも来るよ！」
「はい！」
「よっしゃ！」
三人は御刀を抜き写シを張ると迅移を発動させ散開する。

「さて……ここからは瞬き禁止だ！いくぜ虎徹！」
希は飛びかかる小型荒魂をヒラリと右にステップして回避すると、体幹を軸に虎徹を横薙ぎし上顎と下顎を離れ離れに斬り裂いた。
そして脚に食らいつこうと四つ足で走り寄って来た小型荒魂を鼻っ面を蹴り上げ、左足を踏み切って体を縦回転させると、頭上に浮いた小型荒魂を右足で蹴り飛ばす。
オーバーヘッドシュートと呼ばれる蹴りをくらった小型荒魂は、群れを巻き込みながら数十メートルほど吹っ飛ばされていった。
咆哮を上げ舞依の首を食いちぎろうと狼型荒魂は彼女に飛びかかるが、迅移で数メートルほど下がると、一度抜刀した孫六兼元を鞘に納め居合の構えを取る。
「はぁ!!」
掛け声とともに美しい構えから放たれた居合は狼型荒魂の胴体を真っ二つに切り裂き、そのまま下段に御刀を構え直し近場の荒魂に迅移で接近し斬り祓っていく。
「せいやあああああ！」
藍華は力任せに微塵丸を振るい、その名の通りに小型荒魂をまとめて微塵に打ち砕く。飛びかかってくる荒魂には身体に牙や爪がぶつかる瞬間に金剛身を発動させ攻撃を防ぐと隙を見せた荒魂を叩き潰し、轢かれたカエルのような死骸に変えていく。
藍華達によって群の数はあっという間に数頭の小型荒魂だけになり、それらは逃走を

図ろうとする。しかし、三人はそれを見逃さず迅移で回り込むと先程までは荒魂だった死骸に仲間入りさせた。そして三人は御刀を血払いすると鞘に納めた。

「はあああああ!」

人間の頭骨から尾骨までの骨を模した身体に鷹のような翼を生やした大型荒魂の右翼を姫和の小烏丸が斬り裂く。だが、傷ついた翼を激しくバタつかせ大型荒魂は鳴き声を上げながら空へ上がっていく。

「(浅かったかッ!一の太刀を放った消耗で力が…!)」

「逃げちゃう!」

可奈美が荒魂を見上げてそう叫んだ次の瞬間、八幡力を用いて居合の構えを保ちながら高く飛び上がった舞依は居合斬りを放った。正中線に真っ二つにされた大型荒魂は落下し地面に叩きつけられ、オレンジ色の水たまりを作った

「可奈美ー!」

「衛藤さーん!」

希は藍華は可奈美の名を叫びながら舞依の元へと走る

「舞依ちゃん!希先輩!剣崎さん!?」

「親衛隊……！」
「みんな…どうしてここに？」
「可奈美ちゃんを探していたら荒魂の反応があってここに来たの。おかげで…やっと会えた」
「美濃関の追っ手ということか。ご丁寧に親衛隊まで連れてるとはな」
　姫和はそう言うと臨戦態勢を取る
「違うよ姫和ちゃん！舞依ちゃん達は私の大切な人で！」
「ならなぜ御刀を向けている？」
　姫和の言う通り舞依と希の御刀の切っ先は彼女に向けており、一触即発の雰囲気を漂わせていた
「羽島学長が約束してくれたの。私達と一緒に帰ってくれれば可奈美ちゃんの罪を軽くしてくれるって」
「だが、それには条件がある。十条姫和！お前も一緒に来ることだ！」
「残念だが…それには協力できない」
「協力しなくていいです。私たちが力づくでねじ伏せますから」
　舞依が写シを発動させたと同時に、姫和と希も写シを張る。これは手合わせでもルールが決まっている練習試合でもない。三人は本気の斬り合いをしようとしていた。

「さて…可愛い妹分を返してもらおうか！」
「可奈美ちゃんは…私が助けます！」
「二人とも！待っ！」
「ダメー！」
　舞依と希は迅移を発動させ御刀を振り下ろすが、それは藍華が二人を止める前に間に割って入った可奈美の千鳥によって弾かれた。
「可奈美!?」
「可奈美ちゃん!?」
「ごめん舞依ちゃん…希先輩…私達はまだ捕まるわけにはいかないの。私は見たの！ご当主様が姫和ちゃんの技を受け止めた時…何もない空間から二本の御刀を取り出して…その時に見えたの…。アレは……荒魂だった……」
　可奈美の言葉に藍華達は困惑した。刀使の頂点に立ち大荒魂討伐の英雄である折神紫の正体が荒魂。何を言っているのか三人は理解できなかった。
「紫様が…荒魂？何かの見間違いだよ！紫様は折神家のご当主で…！」
「違う！」
　藍華の言葉に対して姫和は否定の言葉を叫ぶ。
「ヤツは…折神紫の姿をした…大荒魂なんだ！」

「…そ…んな…紫様が……大荒魂……？」

姫和の言葉を聞いた藍華の頭は真っ白になり、その場で両膝をつく。

自身を親衛隊第五席に選び、真希や寿々花、夜見と結芽というかけがえのない仲間たちと出会わせてくれた折神紫の正体は大荒魂だった。刀使が斬り祓うべき存在であった。

そんな事実が藍華の頭の中をかき乱し、心を抉った。

剣崎藍華の物語は動き出す。そして笑顔の守り人はどのような選択を下し、どのような運命が待っているのだろうか。

第十四話

「……報告は以上です」

折神紫の正体は大荒魂だという真実を可奈美と姫和の口から伝えられた藍華達は、折神家に戻り作戦指揮室にて真希達に可奈美達を取り逃した経緯を口頭にて報告していた。

そこには真希と寿々花だけでなく羽鳥学長と五條学長もおり、デスクに並んで腰掛けていた。

「はぁ……時間の無駄でしたわね」

「居場所を特定できただけでもお手柄よ。舞依さんと望月さん、お疲れ様。剣崎さんもありがとう」

「…はい」

「……ん」

「……」

髪を人差し指で弄りながら寿々花は無駄だったと吐き捨てるが、羽鳥学長は三人に労いの言葉をかける。

舞依と希は意気消沈しながらも返事を返すが、藍華は沈黙したままだった。
『折神紫の正体は大荒魂なんだ！』
姫和から告げられた真実が藍華の頭の中をぐちゃぐちゃにかき乱していた。
自分たち親衛隊が守るべき存在であり、藍華に大切な仲間である結芽達と出会わせてくれた紫が刀使が斬り祓うべき存在であったということが。
「藍華ッ！聞いているのか！」
「は、はい！ボーッとはしてません！」
心ここにあらず状態の藍華を真希は一喝すると、彼女は慌てた様子で返事を返し姿勢を正した。
上の空であったことを白状したと同意の返事に、オペレーター達から笑いの声が漏れる。
「語るに落ちますわね。羽鳥学長がお礼を仰っていましたのよ？失礼にも程がありますわ」
「ああ……すいませんでした、羽鳥学長」
「いえ、気にしてないわ。改めて、柳瀬さん達を手伝ってくれてありがとう」
「…はい！」
少しも怪訝な反応をせずに再び笑顔で藍華にお礼を言った羽鳥学長に藍華は微笑み

ながら返事を返した。だが、その笑みは誰が見ても無理をしているのは分かるほど引きつっていた。

「では、状況を整理します。紫様の襲撃から３０時間経過しており、この件はまだ内部に留め報道を控えています。学生達にも調査しましたが、他に共謀者はおらず十条と衛藤の二名のみの犯行と思われます。付近の検問にあたっている刀使達には……」

「もたもたするな親衛隊！さっさと逆賊どもを捕らえろ！」

真希は学長両名に現在の状況を説明する中作戦指揮室のドアが勢いよく開くと同時に剣幕な様子で高津学長が真希達に劇を飛ばす。

それにより真希の現場説明は中断され、部屋にいる全員の注目が高津学長へ集まる

「剣崎と共に追撃に当たった美濃関の刀使二名は貴様らか！なぜ応援をすぐに要請しなかった！」

「ノロの回収を優先すべきと判断しました……」

「ノロなど放置しろ！あろう事か協力して荒魂を鎮圧するなど……！貴様ら！逃亡を幇助したのではあるまいな!?」

舞依と希は鋭い視線を向けながら高圧的な態度で歩み寄る高津学長に怯む。

しかし刀使としてやるべきことを優先したという判断を全否定され、さらには幇助の疑惑すらかけられたことに希は苛立ちを覚えた。

「なるほど。元刀使であるはずの高津学長は放置されたノロが再び荒魂になって、被害が出ても構わないというお考えをお持ちで？」
「貴様！誰に向かって口を！」
　希は嫌味たらしく反論し、それは火に油を注ぐ。目じりを険しく吊り上げて怒り心頭な様子で睨みつける高津学長に希は無言のまま反抗的な表情を見せる
「チッ！貴様らもだ親衛隊！なぜ全員で追撃しない!?御前試合での失態を忘れたとは言わせんぞ！」
「私達も出来ればそうしたいですわ」
「我々親衛隊は紫様の警護命令が出ている為、動けません。藍華を捜索にあたらしたのは本人の強い希望に紫様の許可が下りたからです」
　次に怒りの矛先を親衛隊に向けるが、真希と寿々花は理性的に親衛隊は可奈美たちの捜索に当たることができない理由を述べた。怒りが募る高津学長は親指の爪を噛む
「まあいい……あとは我々鎌府が退職する。両名の消失点周辺の監視カメラを解析させろ！」
　そうオペレーター達に言い残すと作戦司令室を後にした。
　オペレーターの誰かがため息をつくと、オペレーター達は監視カメラ解析作業を開始した。

「剣崎さん、ありがとうございました」
「ううん。気にしないで」
舞依と希を見送るために藍華はエントランス前にいた。
見送ると言っても彼女たちは美濃関に帰るわけではない。万が一の為に新たに事情聴取を行えるよう近場の宿にて美濃関学院の生徒たちは一泊してもらうよう折神家から通達があったのだ。
姫和が在籍する平城学館も例外ではない。エントランス前には駐車場に止まっている送迎バスへ向かう平城学館の生徒たちがちらほらいる。
「なあ剣崎さん……アンタ大丈夫なのか？」
「うぇ？何が？」
「いや、何がって……」
状況を理解していないことに困惑した希は周り軽く見渡すと、藍華の耳元に顔を近づける。
「ほら。頼んだ身で言うのはおかしいけど、親衛隊の人間が可奈美たちを見逃して良かったのかって。追求されたらヤバいんじゃないか？」
「あー……」

可奈美たちと対峙し、信じがたい真実が伝えられたあの日。
三人は可奈美と姫和を雨の中見送ったのだ。舞依にとってはかけがえのない親友であり、希にとっては可愛い妹分である可奈美の意志を尊重したのだった。
親衛隊第五席であり、暗殺を企てたとされている姫和とそれを幇助したとされている可奈美を捕らえるべき立場である藍華にとって、あの行動は折神家にとっての裏切り行為そのものだ。
だが、二人の眼はその場しのぎの嘘をついているような眼ではなかった。それだけは藍華はハッキリと分かったのだ。
「うーん……大丈夫！なんとかなるなる！」
「その根拠は？」
「……さあ？」
「アンタなぁ……」
「それより、二人は私より衛藤さんたちの心配をしてあげて？自分のことは自分でなんとかするから」
藍華のトレードマークである笑顔とサムズアップを希と舞依に見せると、彼女たちは顔を見合わせ頷いた。
「本当にありがとうな。じゃあ、またどっかで会ったらよろしくな？」

「剣崎さん、本当にありがとうございました」
「うん！またねー！」
片手を上げて礼をした希と、丁寧なお辞儀で礼をした舞依が美濃関学院の送迎バスへ向かうのを藍華は手を振りながら見送った。
二人が見えなくなったと同時に携帯のバイブレーダーが起動し、藍華はポケットから携帯を取り出す。ディスプレイには　獅童真希　と表示されていた。
「はい、藍華です」
『藍華、少し話がある。すまないが、執務室まで来てくれ』
「は、はい！」
通話終了ボタンをタップして携帯をポケットにしまうと、駆け足で執務室へと向かった。

「えっと……」
執務室にて。藍華は部屋の中央に置かれたソファーに腰掛け、向かい側のソファーには真希と寿々花が腰掛けていた。
「藍華……」
「（うう……怒られるよね……多分）」

『私が二人を捕まえます!』と意気込んでいながら、捕らえることが出来きず、目の前にいながら逃走を許してしまった。

自分の行動は失態以外のなんでもない。間違いなく真希にカミナリが落ちる。

そう確信した藍華は真希に怒鳴られる覚悟を決める。

「……大丈夫かい?」

「……え?」

「柳瀬さんが報告していたとき、なにか思い詰めたような表情をしてましたわよ?」

「えっと……」

怒られるどころか気にかけてもらえた。

二人の心配そうな表情を見た藍華は自責の念に駆られる。自分のせいで真希達を心配させてしまったのだと。笑顔の守り人を名乗った刀使がする事ではないと。

「聞かせて欲しいんだ。あの二人を追っていたときに、何があったのか」

「……はい」

藍華は全てを話した。十条姫和の口から『折神紫の正体は大荒魂である』と告げられたことを。彼女が嘘をついているようには見えなかったと

「なるほど……そんなことが……」

「真希さん……私は……」

「いや……何も言わなくていい。どうやら十条姫和という刀使は君の心優しさにつけ込んで、根も葉もないことを言ったようだね」
「え？」
真希は立ち上がり、藍華の方を優しく叩く
「藍華、少しは人を疑った方がいい。紫様が大荒魂なはずが無いよ」
「でも……十条さんは……」
「藍華さん、貴女は見ず知らずの彼女と苦楽を共にした私たち……どちらを信用しますの？」
「それは……」
寿々花の言うことはもっともだ。
半年以上も苦楽を共にした仲間たちと、全くと言っていいほど話したことがない平城学館も刀使。どちらの言葉を信じるかなんて考えるまでもない。
だが、姫和が嘘をついているようには思えない藍華は〝姫和は自分を騙した〟と簡単には割り切れないのだった。
「藍華、今日はもう休んでいい。僕たちから連絡があるまで待機していてくれ」
「失敗は取り戻せば良いのです。次はお願いしますわよ？」
「……うん。ありがとうございます」

ソファーから立ち上がってそう言うと、藍華は執務室を後にした。
藍華が退室すると、真希と寿々花の表情は先程と打って変わって険しくなる。
「藍華さん……相当追い詰められていましたわね」
「ああ、まず彼女には気持ちを整理する時間が必要だ。それに……僕たちの仲間の良心を弄んだ逆賊には相応の報いを受けてもらわないとね」
真希は自身の爪が掌を貫かんばかりに拳を握る。その眼に怒りの炎を宿しながら

第十五話

「行きなさい……あのお方の御為に」

夜見はいくつもの古傷がある左手首に水神切兼光の刃を押しつけゆっくりと引く。人間であれば誰しも身体に流れている赤い血が滲み、そして蝶形の小型荒魂の群れが噴き出して月明かりで照らされた雨上がりの山奥から飛び去っていく。

「夜見さん、大丈夫？」

「問題ありません。藍華さんが親衛隊に配属される前から、私の役割は荒魂を使役しサポートに行うことでしたから」

「……そっか」

隣にいる藍華を夜見を気にかけた言葉は本人に素っ気ない返答で終わる。

藍華は短い返事をすると、夜見の荒魂達が月下の夜を群れを成して飛んでいく光景をぼんやりと眺めながら、数時間前の真希達によるブリーフィングを振り返る

「舞草（もくさ）……？」

すっかり自室で眠りこけていたところに、夜見から作戦指揮室に来るよう連絡を受けた藍華は初めて耳にする組織の名前を口にする。

藍華が舞草を知らないことは予想済みだった真希は舞草について軽い説明をする。

「舞草とは刀剣類管理局内の反折神家派メンバーで構成された打倒折神家を掲げている危険な組織だ」

「打倒折神家ということは……」

「ええ。私たちの敵ですわ」

私たちの敵。寿々花の言葉に藍華の表情が微かに曇る。

以前に一度だけ寿々花と共に紫の警護の為に政府高官達との会談に立ち会った事があった。

聞いていて理解できない話が続き、欠伸を噛み殺そうと必死になっていると寿々花から冷たい視線を向けられたのは、今でも覚えていた。

藍華にとって一時間ほどの退屈な会談が終わり、紫と寿々花と共に折神家本部へ戻ろうとエントランスホールへ向かおうとした瞬間だった。

スーツ姿の議員に扮した男性二人が紫に雄叫びをあげながら突進してきたのだった。

すかさず藍華と寿々花は紫の前に立ち、無手で彼らを容易く打ちのめした。

寿々花はこんな大胆な暗殺を二人で行うなどあり得ないと考え、他に仲間がいないか

尋問する為に拘束したが、彼らは奥歯に仕込まれていた自殺用の毒で自らを口封じしたのだった。

毒に苦しみ首元を押さえてのたうち回り、息絶えた光景は藍華の目に焼き付いていた。

「……それで、その舞草がどうかしたんですか?」

藍華は真希達の説明に集中しようと頭の中からあの出来事を振り払う。

「これを見てくれ。オペレーター、映像を」

真希がオペレーターの一人に指示を出すとメインモニターに快晴の空を飛ぶ二機の戦闘機と思われる機体が飛行している姿が映っている。

「先程、南伊豆山中にS装備（ストームアーマー）の射出用コンテナが放たれました。藍華さんもご存知だとは思いますが、S装備を開発し運用できる組織は折神家と刀剣類管理局以外は存在しませんわ。あるとすれば、舞草しか考えられません」

「そして、同時刻に南伊豆で十条姫和たちの目撃情報があった。紫様は二人が接触すると踏んで泳がせていたんだろう。これは一気にカタをつけるチャンスだ」

「そして、我々親衛隊に紫様より出撃命令が出ました」

「出撃命令……」

藍華の表情はさらに曇る。

真希や寿々花は紫の為に、夜見は高津学長の為なら仇なす者が誰であれ容赦はしない。

だが藍華は違う。相手は人々を襲う荒魂ではなく、自分達と同じ血の通った人間だ。人を斬らなければならないかもしれない。そんな不安が彼女の心を更に掻き乱す。人々の笑顔を守る為に刀使となった藍華にとって、同じ人間と戦うことは自身が傷つくことよりも苦痛なのだ。

「藍華、今回君には夜見の護衛をしてもらいたい」

「夜見さんの？」

不思議そうにそう言うと振り返り、背後の夜見に目をやる

「私が荒魂達を山中に解き放ち索敵させ、発見次第獅童さんと寿々花さん両名に反逆者の確保をして頂く作戦となっています。私は獅童さんや剣崎さんのような実力はありませんので、万が一の為に藍華さんには私の護衛を引き受けていただきたいのです」

「それに、貴女は人間と戦うことを激しく嫌っているようですし」

藍華は寿々花の言葉にぐうの音も出なかった。御前試合で写シを張っていなかった姫和を躊躇いなく斬ろうとした真希を止めた一部始終を見ていた寿々花たちは分かっていた。藍華が長所でもあり戦いにおいては短所となる人一倍強い優しさを持ち合わせていることを。

「十条姫和たちの相手は僕たちに任せてくれ。藍華、できるね？」
「うん。大丈夫、夜見さんは私が守るから」
藍華は真希の問いにそう答えると少し微笑みながら、いつものサムズアップをして見せた。
相手が自分と同じ人間であっても、自分を歓迎し必要としてくれた同じ親衛隊の大切な仲間を守ることを優先すべきだと何度も自信に言い聞かせた。
「剣崎さん、頼りしています。三十分後に出撃致しますので、ご準備を」
「うん。あれ？そういえば結芽ちゃんは？」
「燕さんは待機です。彼女が出ると不必要な血が流れますので」
藍華は夜見の言葉に思わず苦笑いを浮かべる。
普通なら親衛隊最強と言っても過言ではない結芽が出れば、事は早くカタがつくと考えるだろう。
たが問題があり、それは彼女は交戦的かつ幼さゆえ感情の制御が効かないからだ。もし暴走してしまったら、真希達が敵と刃を交えながら結芽を制止できる保証などない。紫もそれを鑑みて結芽以外のメンバーに出撃命令を出したのだろう。そう察した藍華は苦笑いを浮かべるしかなかった。

「ねぇ…薫ちゃん。エレンさんは大丈夫かな?」
「心配すんな。ああ見えて、アイツはヤワじゃねえならな。今は先を急ぐことだけを考えろ」
　薫と呼ばれた長船女学園の制服を纏い、桃色のツインテールを持つ小柄な刀使はエレンの心配をする可奈美にそう諭すと彼女と姫和を連れて先を急ごうとするが、そこに夜見から荒魂達が反応したと連絡を受けた真希が三人の前に立ち塞がった。
「流石は夜見。いい仕事してくれる。お陰で苦もなく反逆者と相対することができた」
「お前は……」
　姫和は真希の顔をしっかりと覚えていた。自分の身体に一太刀を浴びせた刀使の顔を。
「折神家親衛隊第一席　獅童真希」
　そう可奈美達に名乗ると薄緑を抜き、正眼に構え写シを張る。
　姫和も千鳥を抜いて写シを張り、二人は臨戦態勢となる。一方可奈美は小烏丸を抜かず、真希を説得しようと試みる。
「待ってください!折神家のご当主様は……」

「大荒魂……かい？悪いが、僕は藍華のように見え透いた嘘には騙されない。紫様に仇なしたこと……そして、僕の仲間の良心を弄んだ報いを受けてもらう！」
「可奈美！来るぞ！」
真希は大きく踏み込み薄緑を可奈美達に袈裟懸けに振り下ろす。その太刀筋は決して変則的ではなく、真っ直ぐなものだった。しかし、それは大太刀の斬撃の如く剛剣と呼ぶに相応しかった。
その剛剣をまともに受けた二人の写シを纏った身体は袈裟懸けに斬り裂かれる。
「(なんて剛剣！これが親衛隊!?)」
「(チッ！ここで捕まるわけには！」
「行け！お前ら！」
真希の背後から薫は自身の背丈よりも何倍もの長さを持つ御刀　祢々切丸　をブーメランのように放り投げる。重々しく風を切る音を鳴らし祢々切丸を真希は体幹を横に傾け回避する。
「可奈美！迅移だ！」
「う、うん！」
「逃さないよ」
「ねー！」

大きな垂れ耳にリスのような小動物が、命中し損ねた祢々切丸の柄に蛇を模した尻尾が巻きつけて祢々切丸を真希の背後に向け投げ飛ばす。完全に虚を突かれた真希は祢々切丸に胴体を両断される。

「がっ!?」

写シが解除され生身の身体が本当に斬り裂かれたような痛みに意識を奪われそうになるり、その場で膝をつく。

「御刀が無いからって油断したな親衛隊。悪いが俺には　ねね　っていう相棒がいるんだよ」

「ねねー!」

ねねと呼ばれた小動物は祢々切丸を肩に担いだ薫の頭の上に乗る。

「……貴様……紫様の刃たるこの僕に……太刀を浴びせたな?」

真希は膝をついたまま静かにそう言葉を発する。

またしても逆賊達を捕らえる邪魔をされた。最初の親衛隊であり、紫の刃である自分が太刀を浴びせられた。それは彼女のプライドを傷つけ、怒りの炎を燃え上がらせた。

彼女は怒りで先程の痛みを消し飛ばし、目の前の憎き刀使に怒りの刃を叩き込むために立ち上がる。

「覚悟してもらうよ……!」

薫も写シを張り祢々切丸を構えるが、そんな事は真希は許さなかった。
怒りの剛剣は薫の身体に叩き込まれ、先程とは逆に薫が地面に伏された。
「さて……君には聞きたいことがある」
「くっ……ああ?」
真希は息を荒くしながら自身を睨みつける薫に近づき、薄緑の切っ先を向ける。
「今朝、射出された所属不明のS装備…反逆者両名への接触。君には舞草の構成員の疑いがある」
「はぁ?…モグサ?お灸に…興味ないぜ…」
「あくまでシラを切るつもりかい?少し痛い目にあってもらう必要がありそうだ」
「ねねー!ねー!」
薫の態度にイラつきを隠せない真希は薄緑を上段に構えると、ねねが薫と真希の間に割って入る。
「主人に手出しはさせない!」と言わんばかりに鳴き、真希の前に立ち塞がる。
「な…にを…!?」
薫を庇うねねが平城学館在籍時代の自分と重なり、大切な仲間達を守れなかった光景がフラッシュバックする。
『獅童隊長!助けてェ!』

『いやあああああ！』
　あのとき足を負傷し、荒魂たちに群がられ身体を食い尽くされる後輩達の悲鳴が頭の中で木霊する
『私は必要以上に人を傷つけて欲しくなかっただけです！』
　そして反逆者たちを取り逃した際に言い争った藍華の言葉も頭の中に響き渡り
、真希の心を掻き乱す。
「今だっ！」
　動揺した真希の隙をついて薫はねねと共に崖下へと飛び降りた。
　真希は崖下を確認するが、たくさんの木々以外にはそこにはなにも見えなかった。
　覚悟を鈍らせ舞草の構成員を取り逃した。その事実はさらに真希の怒りを増幅させ、内なるノロが活性化し彼女の眼を紅く染める
「紫様に仇なす反逆者…！」
『真希さんからの要請です。偵察の数を増やしてください』
「はい……承知しました。剣崎さん、此花さんからの要請です。偵察の増援を放つようにと。ノロアンプルをこちらに」
「……うん」

寿々花からの連絡を受けた夜見は携帯を上着のポケットにしまうと、藍華に預けていたノロアンプルを要求する。藍華は浮かない表情で返事を返すとノロアンプルを取り出す。

オレンジ色に光る荒魂の元となるノロ。

夜見が力を発揮するためとはいえ、藍華はいずれ夜見の身に何か起こってしまうのではないかと不安の渦が広がり、手渡すことを躊躇う。

「……剣崎さん」

早くしろとの意味を込めて夜見は藍華の名前を呼ぶ。藍華は静かに頷き、夜見にノロアンプルを渡そうと手を伸ばす。だが、それは夜見にではなく第三者の手に渡る。

突如小枝が折れる音が鳴り、それとほぼ同時に影が二人の間に横切りノロアンプルを奪い取ったのだ。

「えっ!?」

「貰いまシター!」

影の正体は長船女学園の制服を見に纏い、欧米人のような整った顔立ちを持つ長い金髪碧眼の刀使だった。金髪碧眼の刀使は満足そうにノロアンプルを指で器用にクルクルと回す。

「貴女は…舞草の刀使!?」

「モグサ？お灸には興味ありませーン。ちょーっと手先が器用な通りすがりの刀使デース」
「剣崎さん、荒魂で支援致します。前衛はお任せします」
「……うん！」
相手は刀使。だが、やらねばならない。信頼してくれる真希や寿々花の期待に応える為に。夜見を守る為に。
「でやああ！」
両者は写シを纏い、自身の御刀である微塵丸と越前康継の刃をぶつけ合う。その度に火花が散り、迅移を用いて目まぐるしい動きを見せながら刃をぶつけ合う。
夜見は荒魂を使役し、金髪の刀使に纏わり付き動きを阻害しサポートする。
「厄介デスね！」
金髪の刀使はまず後方支援の夜見をなんとかするべきだと分かってはいるが、は夜見が作ってくれた隙を見逃さず猛攻を仕掛けてくる藍華に手を焼かされていた。
「刀使が得意なのは剣だけとは限りませんヨ！」
藍華は金髪の刀使に微塵丸を切り払われ、鳩尾に体重を乗せた蹴りを見舞われる。
腕力自体は藍華が勝ってはいるが、体格は向こうが勝る分攻撃の重さはあちらが上のようだ。

「グッ！こっちだって！」
　蹴りを見舞ってきた右脚を掴み、体幹を軸にし回転し数メートル先の木へ投げ飛ばす。八幡力を用いた投げは金髪の刀使を派手に木へ叩きつけ、その場で膝をつかせた。
「あうっ！」
「夜見さん！」
「はい！」
　金髪の刀使は越前康継を拾い上げ立ち上がろうとするが、夜見の荒魂が顔に群がりそれらを振り払おうと必死となる。そこに藍華と夜見は迅移で距離を詰め、微塵丸と水神切兼光を袈裟懸けに振り下ろした。写シを剥がされた金髪の刀使はその場で座り込む。
「ハァ…ハァ…。せっかくアンプルを手に入れたのに…ちょーっとマズイデスね」
「もう写シは張れませんね。お覚悟を」
　とどめを刺す為に夜見は水神切兼光を握りなおすが、藍華が彼女を静止する。
「待って、もう戦意がないならこれ以上戦う必要はないよ」
「しかし私の命令は反逆者両名の偵察に、それを邪魔する脅威の排除です」
「　排除　と　殺す　のは違うよ。それに、この人はもう脅威じゃ……」
　藍華が夜見を説得していると突如、重々しく風を切る音が背後から鳴る。藍華が振り向くと同時に金髪の刀使が座り込んでいる木と、写シを張っている藍華の身体が真っ二

つに両断された。
「うああっ！」
「剣崎さん…！」
　写シが解け、倒れ込みそうになる藍華の身体を夜見は受け止める。
「生きてるな、エレン」
「薫！」
　エレンと呼ばれた金髪の刀使はS装備を纏い、駆けつけてくれた薫の名前を叫ぶ。そこには日和と可奈美も一緒だった。
　藍華は完全に気を失い、相手は四人に増え状況は一気に劣勢になった。この状況を単独で覆すのは不可能だと夜見は理解していた。
「さあ……降参しろ。お前たちに勝ち目はない」
「終わり？ほんとうにそうでしょうか？」
　夜見は藍華を木陰にゆっくりと横に寝かせると、隠し持っていたノロアンプルを指の間に挟んだ状態で取り出す
「(私は…何者にもなれなかった。あの方から受け取った力がなければ…。あの方の為なら…私は……！)」
　夜見は八つのアンプルを強く首に刺しノロを投与する。彼女の周りに黒く禍々しい

モヤが巻き上がり、それは彼女を飲み込んだ。モヤにふれた草木は枯れて、地面へと舞い落ちる。

モヤが晴れるとそこには夜見がいた。だが、それは人とは呼べない姿へと変貌していた。

左目には黒いツノが生え、そこには巨大な目玉がギョロリと薫達を捉えており、唯一無事である右眼は虚で正気を失っている眼だ。

「なんだ……ありゃ……」

「(これが手紙にあった人体実験……。人はこんなにおぞましくなれるものなのか……)」

「がああああっ!」

獣のような雄叫びを上げると、夜見は薫達へ突進しあたり構わず水神切兼光を力任せに振り回す。無茶苦茶な動きから放たれる斬撃は速く重く、薫と姫和を切り裂く。その動きは身を守ることを捨て、対象を排除することしか考えていないようだった。

「グッ!」

「なんっつう力だよ!」

「こっちだよ!」

２人から夜見を引き離す為に可奈美は叫ぶと、巨大な目玉が彼女を捉える。

夜見は可奈美に水神切兼光を振り下ろし防御させると、首を掴み彼女の身体をそのまま持ち上げる。
「がはっ！あうっ！」
「ぐぎゃあああ！」
「（ほんとうに人が……荒魂にっ！）」
「斬れ可奈美！そいつはもう人じゃないんだ！」
このままでは可奈美は首を折られてしまう。それは可奈美も分かっていた。だが、あの時言ったのだ。自分は人は斬らないと。首はみるみる締まり、息すらできなくなり始めた時
「夜見さん！」
いつの間にか目を覚ました藍華は夜見に体当たりし、可奈美から引き離す。解放された可奈美は地面に転がり激しく咳き込む。
「ぐがあっ！」
藍華を振りはなそうと夜見は激しく暴れるが、藍華は八幡力を用いて夜見を押し倒し地面押さえ込む。
「夜見さん！ダメだよ！自分であることを捨ててまで戦っちゃダメ！夜見さんの帰りを待ってる人達がいるんだよ！夜見さん！」

「がぎゃあああああ！」

藍華は必死に呼びかけるが、ノロの力に呑まれている夜見には届かなかった。夜見は対象の排除の邪魔をする藍華の腹部に水神切兼光を突き立てた。

「がっ……うう……」

藍華の背中から真っ赤に染まった水神切兼光の刀身が顔を出し、彼女の親衛隊制服も赤黒く染め上げていく。だが、藍華は夜見を離さなかった。夜見が苦しんでいたからだ。

「うう…があ…あああっ…」

夜見の身体から黒いモヤが現れ、角の目玉がギョロギョロと激しく動き回まわり、身体を激しく痙攣させ、目から涙を、口から唾液を垂れ流しながら苦悶の表情を浮かべていた。

夜見を救いたい。その強い思いが藍華の意識を繋ぎとめていた

「…夜見さん…大丈夫…　今日は…休んで？夜見さんは…頑張ったよ…私は…分かってるから…」

腹部を貫かれながらも、藍華は微笑みながら苦しむ夜見を優しく抱き寄せる。

すると青白い光の粒子が藍華の身体から現れ、夜見の体を包み込む。夜見の左目から生えたツノが粒子に触れると、まるで水に溶ける氷砂糖のように溶けていき、水神切兼

光を振り回して自身まで切り裂いた傷も消えていった。
　光の粒子が消えた後には皐月夜見は人の姿を取り戻していた。
「けん…ざき…さ……ん」
「夜見さ…ううっ…」
　二人はお互いの名を呼ぶと気を失い、地面へと伏した。
「今のは……剣崎さん！」
　可奈美達は藍華達の側に駆け寄り、容態を確認する。
「こっちは大丈夫みたいだが、刺されたソイツはヤバそうだな……」
　藍華の身体には水神切兼光は刺さったままで、出血はさらに地面にまで達し赤黒い水跡を広げていた。
「なんとかしないと！」
「可奈美！急がないと他の親衛隊達が駆けつけてくる！今は他人の心配をしている暇なんてない！」
「でも！」
「私たちにできることはない！親衛隊の仲間に任せておけばいい！」
　姫和の言うことは最もだった。医療キットどころか絆創膏ひとつない可奈美達に藍華に処置することはできない。さらに目的のために今ここで捕まるわけにはいかな

かった。

「……剣崎さん!ごめんなさい!」

そう言い残し、可奈美達はその場から立ち去った。その数分後真希達が救護班を率いて藍華達の到着した。夜見と腹部を御刀に貫かれた状態で力なく横たわる藍華を見た真希と寿々花は血相を変え、彼女のもとへ走り寄った。

「夜見!藍華!」

「藍華さん!私の声が聞こえますか!?藍華さん!藍華さん!」

二人は藍華と夜見の名を叫ぶがピクリとも反応しない。その後、救護ヘリに乗せられた二人は折神家が管理する医療施設へと移送された。

山狩りは反逆者を逃した挙句、親衛隊の一人が重傷を負うという失敗に終わった。

第十六話

「ここ……は……？」

藍華は目を覚ますと暗闇の中にいた。たが、自分自身の身体ははっきりと見え、辺り一面真っ暗の空間に立っていたしていた。まるで、自分以外が真っ黒に染まってしまった世界にいるかのように。そこに突如、聞き慣れた声が響き渡った。

『（私は……何者にもなれなかった……）』

「え？夜見さん？どこ？」

悲しみに満ちた夜見の声が聞こえ、藍華は辺りを見渡す。そして、背後には一人たたずむ夜見がいた。暗闇の空間に不自然に映し出された鎌府の練武場と思われる場所に彼女は立っており、髪は黒く鎌府女学院制服を纏っていた。

壇上の周りには紅白幕が飾られていて、卒業式を行った後だと思われる。

「夜見さん！」

藍華は夜見のもとへ走るが、見えない壁に阻まれているかのように前に進むことができない。必死に見えない壁を叩き夜見の名を呼ぶが、藍華に気づく気配はない。まるで、夜見には藍華の存在が認識していないように。

『刀使の試験に合格して、私は秋田を離れた。家族と故郷のみんなも誇りだと喜んでくれた』

そして夜見の声が再び響き渡る。一人ただずむ彼女の表情は悲しみに暮れていた。

『(努力を惜しんだことはない。訓練には誰よりも早く行き、誰よりも遅く残った。早く刀使になりたくて、休日もひとりで剣を振った。けれど私は…御刀に選ばれなかった。力が……無かったから)』

「これは……夜見さんの……過去?」

夜見は鎌府女学院出身なのは藍華も知っていた。以前に刀使になれなかったことも彼女の口から直接聞いていた。そして藍華は今見て聞いているのは夜見の過去であると考えた。どうして夜見の過去が見えているのかは分からないが、それしか考えられなかった。

『(自分に力がないという事実を受け入れるしかなかった。けれど、故郷に逃げ帰ることはできなかった……喜んでくれたみんなの笑顔が浮かんで……。失望させたくなかった……苦しかった……悔しかった……)』

「夜見さん……!」

自分の無力さに、不甲斐なさに押し潰されてしまいそうな夜見に藍華は側に駆け寄りたかった。側に駆け寄り彼女を励ましたかった。だが、藍華と夜見の過去を隔てる見え

ない壁は笑顔の守り人を無慈悲に阻む。そして見えない壁の向こうにいる夜見は暗闇に包まれて消える。

『力を欲するならば授けましょう。大丈夫、あなたには力を受けるにふさわしい資格があるのだから』

高津学長の声が響き渡ると、夜見と高津学長が現れた。

学長室で二人は向き合い、高津学長は夜見に優しい笑みを向けていた。

『(私に資格があると言ってくれた。私に力を与えてくれた。高津学長だけが私を認めてくれた。高津学長は私に希望をくれた。高津学長のためなら、何も惜しくはない。自分の命さえも……)』

「……夜見さん」

藍華はなぜ夜見が高津学長に献身的に尽くしているのかを完全に理解した。刀使になれず絶望に打ちのめされていた自分に力を与え、力を得るに相応しいと認めてくれた恩人なのだと。彼女の身体に宿している荒魂達も高津学長から受け取った大切なものなのだと。

「うっ……!?」

突如、辺りが光に包まれて藍華の視界は白く塗りつぶされた。

「…ここは一体？」

夜見は目を覚ますと暗闇の中にいた。たが、自分自身の身体ははっきりと見え、辺り一面真っ暗の空間に立っていたしていた。まるで、自分以外が真っ黒に染まってしまった世界にいるかのように。そこに突如、幼い子供の声が響き渡る。

『（わたし……どうしたら……）』

「子供の…声？」

夜見は辺りを見渡す。そして背後には部屋の隅に座り込み顔を俯かせている幼い少女がいた。少女は青空の様な青く長い髪を持ち、紺色のスカートに水色の長袖服を着ている。

暗闇の空間に不自然に映し出された部屋には折り紙で作られた様々な動物が壁に飾られ、ランドセルやナップサックが収納されている木製の棚の上には様々なぬいぐるみが置かれていた。

『藍華ちゃん？』

「剣崎……さん？」

藍華の恩師である千里が彼女の名を呼ぶと、彼女の側に歩み寄る。藍華の名を聞いた夜見は俯いたままの少女が藍華であると気づく。夜見は彼女の元へ歩み寄ろうとするが、見えない壁が彼女を阻む。夜見は見えない壁に右手を置き、成り行きを見守る。

『千里…先生…。わたし……どうしたらいいんだろう？お父さんやお母さんのことも……自分のことも覚えてない……空っぽなの。わたし……どうしたらいいか分からないよ……』

藍華は俯いたままそう呟く。

「（これは…剣崎さんの…過去？）」

夜見も以前に彼女の口から自分には幼い頃の記憶がないことを聞いていた。そして、折神家が支援している児童養護施設のあおぞらで育ったことも。その彼女の過去を今自分は見て聞いているのだと夜見は確信した。

家族はおろか、自分が何者かすら分からない不安は底知れない。ましてや幼い少女には耐え難いもので、藍華が不安に呑まれ一人蹲っているのも無理はなかった。

『藍華ちゃん、見て？』

千里は棚から大きなイチゴ大福ネコの被り物を取り出して被ると、４つのゴムボールでお手玉を始めた。千里の声で俯いたままだった涙で濡れた顔を上げた藍華は少し困惑するが、シュールな光景に思わず笑みが溢れた。

『ふふっ…やっと笑ってくれたわね？』

千里はゴムボールを全てキャッチして被り物を脱ぐと、藍華の頭をまるで母が我が子を愛でるように優しくなでる。その温もりと優しさに不安で一杯だった藍華の心に安

堵感が流れ込む。

『貴女は一人じゃないわ。先生もいるし、あおぞらの生徒達も貴女の家族みたいなもの。今は空っぽでも、私たちと楽しい思い出を作って満たしていきましょう?そうすれば、藍華ちゃんも元気に笑顔になれるわ』

千里はそう言いながら微笑んだ。

『(それから私は千里先生やあおぞらの仲間達と一緒に育った。空っぽな私を笑顔にしてくれたんた)』

そして藍華と千里は一度闇に包まれ、再びあおぞらの教室が映し出される。藍華が座り込んでいた場所には、肩を震わせながら泣いている幼い少年がいた。

『お父さん……お母さぁん……』

あおぞらに入所してくる子供達の大半は荒魂に家族を奪われた子なのは、夜見も知っていた。あの男の子も荒魂に家族を奪われ孤児となった子なのだ。

一人ただ泣きじゃくる少年に藍華は千里が自分を励ましてくれた時に使ったイチゴ大福ネコの被り物とゴムボールを脇に抱え、彼に歩み寄る。

『ねぇ?』

藍華に声をかけられた少年は涙で濡れた顔を上げる。すると、藍華があの時の千里と同じように被り物を被った状態で4つのゴムボールでお手玉をしてみせた。少年は最

初は戸惑っていたが、直ぐにその面白おかしい光景に思わず笑顔を浮かべた。
『どう?上手いでしょ?やってみる?』
『……うん』
少年は涙をシャツの袖で乱暴に拭うと、藍華からゴムボールを受け取りお手玉の練習を始め、藍華も手本を見せながらコツを教えてみせる。
しばらくすると、少年も上手くお手玉をすることに成功し大はしゃぎした。その姿を見て嬉しくなった藍華も自分の事のように喜んだ。
『藍華ちゃん』
千里の声が聞こえた藍華は振り向くと、千里が笑顔でサムズアップをしていた。
『千里先生?それなにー?』
藍華は不思議そうに千里のサムズアップを指差した。
『これはね、素晴らしい行いをした人に与えられる仕草よ。今の藍華ちゃんは泣いていたあの子を笑顔にした。誰かの笑顔の為に必死に頑張れる……先生はとても素晴らしいことだと思うの』
『誰かの……笑顔の為に……』
藍華は少年に目をやると、さっきまで蹲って泣いていた子が笑顔でお手玉を練習している。そして、その光景をみたクラスメイト達も加わり心から楽しそうにしていた。

『……先生』

『ん？』

『私……なるよ。誰かの笑顔の為に頑張れる人に！誰かを笑顔にして！笑顔を守れる人に！』

藍華は立ち上がり声高らかに言うと、千里に笑顔でサムズアップをしてみせた。そんな藍華に千里も優しい笑顔を浮かべてサムズアップを返した。

「剣崎さん……」

笑顔の守り人。そう名乗り刀使として刀を振るう理由を夜見は完全に理解した。恩師である千里に自分の記憶すらない空っぽな自分に笑顔を貰い、彼女自身も誰かに笑顔を与えて、笑顔を守れる人間になることを志したのだと。

「んっ……」

突如、辺りが光に包まれて夜見の視界は白く塗りつぶされた。

「んん……」

藍華は目を覚ますと見慣れない真っ白な天井が広がる。身体を起こすと身体を包んでいた毛布がめくれ、自分はベッドで眠っていたことに気づく。どうやら、ここは折神

家の医務室のようだ。隣には夜見がベッドで眠っており、点滴パックが吊るされている点滴スタンドが置かれている。暴走した際にツノが生えていた右眼は包帯で覆われており、首元にも包帯が巻かれていた。

「剣崎さん？」

目を覚ました夜見は仰向けのまま、藍華に視線を移した。

「夜見さん！だいじょう…ぶっ!?」

目を覚ました夜見の側に駆け寄ろうと立ち上がった途端、暴走した夜見に水神切兼光で貫かれた腹部に激痛が走る。その痛みに思わず足をもつれさせてしまい、真っ白な病衣姿の藍華は床にギャグ漫画顔負けなほど派手に転んでしまった。そんな藍華を見た夜見は思わず身体をベッドから起き上がらせる。

「剣崎さん…！」

「あはは……大丈夫大丈夫……いたた……隣いいかな？」

「はい、どうぞ」

床に激しく打ちつけて真っ赤になってしまった鼻を右手で押さえながら、藍華は夜見のベッドに腰掛ける。夜見もベッドから起き上がると藍華の隣に腰掛けた。

「夜見さん、大丈夫？」

「ええ、少し身体が痛む以外には。それより、剣崎さん……私は貴女に御刀を……」

夜見は包帯が巻かれた右手に視線を移した。ノロの過剰投与で暴走していた最中でも覚えていた。藍華を御刀で刺し貫いたことを。御刀越しに仲間の身体を貫く生々しい感触を。

「大丈夫！私って丈夫だから！」

「先程痛みで転んでいたではないですか」

「あー……さっきのは変に身体を動かしたからだよ！大丈夫！」

藍華は口癖の大丈夫を口にして、笑顔でサムズアップを夜見に見せる。

「藍華さん…私にその仕草は相応しくありません。逆賊達を逃してしまった挙句、貴女を傷つけてしまったのですから。満足がいく功績を上げることができなかった私には……」

「え……？」

「気を失っている最中に何故か……藍華さんの過去が見えました。あおぞらで幼い藍華さんが榊さんに励まされ、そして他の子供を励ましていた過去が」

「夜見さんも？わ、私も！夜見さんの過去が見えたの！鎌府にいた頃で、まだ髪も黒くて！高津学長に相応しいって認められてて！」

藍華の言葉に夜見は目を見開く。こんな不可解な現象が起こることがあるのかと。

「では、私が御刀に選ばれずに……ただ一人途方に暮れていたことも……」

「……うん。過去の夜見さんの心の声が聞こえたから」
　不可抗力とはいえ、自身の過去を覗かれるのは気持ちの良い物ではない。夜見は藍華は誰彼構わず他言するような人間ではないのは理解しているが。
「ねぇ、夜見さん？私も夜見さんのために無茶をしていいかな？」
　突拍子のない藍華の発言に夜見は目を丸くした。
「何を…言って…」
「夜見さんはこれからも無茶するでしょう？高津学長の為に。そんな夜見さんの力になりたいんだ。誰かのために必死になれる夜見さんの力に……」
「私の…力に…？」
「うん！二人ならもっと高津学長の為に頑張れるよ！」
　藍華は屈託のない笑顔で夜見にそう言った。
「（無茶を……あの時のように……）」
　夜見の頭に藍華を貫いた記憶がフラッシュバックし、右手にあの時の感触が再び蘇る。もし自分がまた暴走してしまったら、藍華はあの時のように自らを顧みずに自分を救うつもりなのだろうか。
「だから夜見さん！大船に乗ったつもりで……」
「不要です」

「うん！不要です！……うぇ!?」

藍華は困惑して変な声を思わず出してしまう。まさか、夜見の力になりたいという提案を不要という言葉で拒絶されてしまうとは思わなかったからだ。

「不要です。これは貴女が関わることではありません」

「で、でも！私は夜見さんが苦しんだり！傷ついたりするのが嫌なの！私が……夜見さんの苦しみや痛みを背負えたら……」

「不要だと言いました。私の過去が見えたのなら剣崎さんもご存知のはず。あの方の為なら……私は命すら惜しくありません」

命すら惜しくない。そんな自分を蔑ろにしている言葉に藍華は声をあらげる。

「そんなのダメだよ！夜見さん！命すら惜しくないなんて！夜見さんが死んじゃったらみんな悲しむよ！私も！結芽ちゃんも！寿々花さんも！真希さんも！高津学長だって！」

「貴女は私の存在意義を否定するのですか？それに、貴女も私を救う為に致命傷を負ったはずです。それは、自分を蔑ろにしているとは言わないのですか？」

「それは……」

「剣崎さん、貴女は強く優しい刀使です。ですが、優しさが何もかもを救うとは限りません。少なくとも、私にはその優しさは必要ありません」

藍華の表情はみるみる悲しみを帯びていく。だが、自身の善意を拒否されたからではない。夜見の力になりたいという願いは、彼女を逆に苦しめてしまうとわかったからだ。

「……ごめん。ちょっと散歩して頭を冷やしてくるね？」

藍華は悲しそうな表情を笑顔で誤魔化すと病室を後にした。その後、夜見はベッドに仰向けになる。

「（これで……良かった。剣崎さんの優しさは私以外の他の方々の為に……。彼女まで、あの方の為に命を削る必要はない……）」

夜見は目を閉じて再び眠りに落ちた。

第十七話

「夜見さん……」

時計の短針が夜の8時を指す頃。病衣から予備の親衛隊服に着替えた藍華は仕事終わりの刀使と職員達で賑わう食堂にて夕食をとっていた。いつもは溢れんばかりの笑顔で幸せそうに食事をしている藍華だが、今は浮かない表情で大盛りのカツカレーを口に運んでいた。

「藍華お姉さん！」

「ん？」

振り向くと、真希と寿々花を連れてこちらに小走りで駆け寄ってくる結芽の姿があった。

「もう！あんな大怪我したのに動いちゃダメじゃん！」

「えっと……お腹空いちゃって……えへへ……」

「まったく……医務室にいないと思って探してみれば……」

既にテーブルには平らげた後のカレー皿が五皿ほど重ねられており、その光景を結芽達は呆れた様子で見ていた。藍華の大食漢っぷりは今に始まったことではなかった。

たが、まさか瀕死の重傷を負ったばかりなのにも関わらずにカレーを5人前平らげるほどとは結芽達も思ってもみなかったのだ。

「もう満足されたでしょう？医務室に戻りなさいな」

「うん……」

「藍華お姉さん？」

「みんな……少しだけ……相談いいかな？」

神妙な表情でそう口にした藍華を見た三人はただ事ではないと察して静かに頷き、藍華と同じテーブルに腰掛ける。結芽は藍華の隣、真希と寿々花は藍華とは向かい側の席に腰掛けた。

「相談というのは？」

「うん……夜見さんの事でね……」

藍華は数時間前医務室での夜見とのやり取りを詳しく話した。彼女は高津学長のために身を削る夜見の為に自身も身を削りたいと伝えたが、その思いは受け取られなかったことを。

優しさが全てを救うとは限らない。夜見の言葉が気がかりであることを。

「なるほど……事情は分かったよ。藍華が落ち込むのは分かる。でも、夜見の気持ちも理解できるんだ」

「え？」
「もし夜見が、君が普段無茶をしているのと同じように〝人々の笑顔を守るのを手伝いたい〟と言ったらどうする？」
「それは……」
藍華の頭には、夜見が自分がやるべき事の為に傷つき戦う光景が頭に浮かぶ。そしてその光景は藍華の心を強く締め付け、罪悪感に苛なまさせる。
「夜見さんにとって〝高津学長の為に刃を振るう〟ことは彼女が刀使であり続ける理由であり、自分自身で成し遂げねばならないこと。それに藍華さんを巻き込もうとは思わないでしょう」
「でも……私は……」
真希と寿々花の言っている事は理解出来るが、またこれからも夜見は高津学長の為に命を削ろうとするのをただ見ている事は到底出来ない。あの時もそうだ。身体を殆どノロに侵食させながらも戦う夜見をとても放っておけなかった。
だが、その優しさが夜見の生きがいを奪ってしまうのも彼女は絶対したくないのだ。
そんな致命的なジレンマが藍華のメンタルをさらに追い詰める。
「ねえ？藍華お姉さん、何難しく考えてるわけ？」
「……え？」

場に漂う重い空気を切り裂いたのは結芽だった。何をそんなに悩んでいるのか到底理解できないといった様子で彼女は口を開いた。
「藍華お姉さんは高津学長の手伝いがしたいの？高津学長の為に夜見お姉さんを守りたいの？」
「それは違うよ。私は同じ親衛隊の一員の……大切な夜見さんの為に……」
「なら、それでいいじゃん。〝夜見お姉さんを守りたい〟で」
「……あ」
結芽の言葉に藍華は目の前の霧が晴れたような感覚を得た。藍華は高津学長の為に夜見を守りたいわけではない。誰かのために必死になれる夜見を……大切な仲間である夜見を守りたいのだ。そこに難しい理屈は存在しない。純粋な願いなのだ。
「ありがとう！結芽ちゃん！」
「わわ!?」
藍華は突然立ち上がり結芽を抱きしめて頭を撫でると、大皿が乗ったプレート食器返却棚に返すとまるで嵐のように食堂から飛び出していった。
「ちょっと!?藍華お姉さん!?」
「行ってしまったな……」
「落ち込んだり、元気になったり……忙しい子ですわね……」

「（剣崎さん……遅いですね……）」

医務室にて夜見はベッドに腰掛けたまま、窓から見える夜空に浮かぶ満月を眺めていた。藍華が散歩に行ってくると医務室を出てから2時間ほど経っていた。

夜見は藍華を突き放したことに少なからず罪悪感を持ち始めたが、それは直ぐに消え失せた。

「（あの方の為に尽くす……それは私だけの力で成さなければなりません。あの方から頂いたこの力で……）」

夜見は荒魂を呼び出す為に斬り裂いてきた古傷だらけの左手首をじっと眺める。

「夜見さん！」

突如医務室のドアが勢いよく開き、夜見はそこに視線を向けると息を切らして肩で呼吸をする藍華がいた。

「藍華さん？そんなに息を切らしてどうしたのですか？」

「はぁ……はぁ……夜見…さぁん…話が……」

「まずは深呼吸してください」

藍華は夜見の言う通りにゆっくりと深呼吸を三回ほど繰り返し、息を整える。

「ふぅー……夜見さん。さっきの話なんだけどね？」

改めて話を切り出した藍華は真面目な表情で夜見の隣に腰掛ける。
「夜見さんはこれからも高津学長の為に頑張るんだよね？たとえ、傷だらけになっても」
「はい。これだけは……たとえ命に変えても譲れないものなのです。私の全ては彼の方の御為にあると」
「そっか……私は夜見さんを応援するよ。夜見さんのその譲れない思いを誰も止める権利は無いと思う。でもね……私も夜見さんと同じように譲れないものがあるんだ」
「剣崎さんの譲れないもの……それは？」
夜見が問うと、藍華は目を閉じ深呼吸すると再び目を開けて口を開いた。
「〝みんなの笑顔を守ること〟と〝大切な人達を守ること〟」
「大切な人達を守ること？」
「うん……その大切な人達に夜見さんもいるの。誰かの為に必死になれて、努力家で、同じ親衛隊の夜見さんも」
藍華は夜見を見つめたまま、彼女の左手を両手で握り優しく包み込む。その瞳を見るだけでには数段階重ねた金剛身よりも遥かに硬く揺るぎない意志を秘めている事が分かった。
「つい先ほど伝えました。その優しさは私には不要だと」
「不要じゃない」

「また貴女を傷つけてしまうかもしれません」
「私は頑丈だから大丈夫」
「学長の為に貴女の優しさを利用してしまう日が来てしまうかもしれません」
「いいよ。夜見さんの力になれるなら」
突き放そうと不穏な言葉を投げても、藍華は跳ね返す。この会話から藍華を突き放すのは無理だと分かった夜見は目を閉じて軽くため息をつく。そして目を開き、注視しなければ分からない程ほんの微かに微笑んだ。
「では剣崎さん、頼りにさせていただいてもよろしいですか?」
「……ッ!うん!任せて!」
藍華は先程の真剣な表情から打って変わって、いつもの溢れんばかりの無邪気な笑顔で夜見にサムズアップをみせた。
「ちょ!?わわわああ!!」
突如結芽の悲鳴が聞こえたと同時にドアが開く音と誰かが派手に転んだような音が医務室に響き渡る。そこにはうつ伏せで倒れ込んでいる結芽がおり、ドアの向こうにはその光景をため息をつきながら見ている真希と寿々花、それに相楽学長に入館許可証を首から掛けている千里がいた。
「燕さん……それに皆さんお揃いで」

「結芽ちゃん!?大丈夫!?」
　藍華は結芽に駆け寄り、立ち上がる手を貸すと怪我がないか確認する。
「あはは……ありがとう、藍華お姉さん」
「自業自得だ。盗み聞きなんて趣味の悪いことをする」
「藍華さんが食堂を飛び出した後、藍華さんを追うように去っていったと思ったら、案の定でしたわね」
「だって気になったんだもん！二人が仲直りできるかどうか！」
「それで……藍華と夜見の見舞いに来た私たちはどんな表情をすればいいんだろうな、千里？」
「そうねぇ？とりあえず笑顔でいればいいと思うわぁ」
　相楽学長は千里とそんなことを話しながら医務室に入室し、藍華の元に歩み寄る。
「千里先生！結月さっ！わぷっ!?」
「相楽学長だ」
「ふふっ……藍華ちゃん、元気そうでなによりだわぁ」
　いつものように相楽学長と千里に抱きつこうとした藍華だったが、前と同じようにおでこを手で押さえられ阻止されてしまう。見慣れた光景に千里は思わず笑みを溢す。
「あれ？ない！ない！」

結芽は青ざめた顔をしながらスカートのポケットをひっくり返すと、次はしゃがみ込んでベッドの隙間を覗き込む。
「結芽？一体どうしましたの？」
「ないの！藍華お姉さんに作ってもらった私のイチゴ大福ネコが！転んだ時にどっか行っちゃったのかな!?」
「燕さん、こちらに。先程転ばれた際に足元に転がってきましたので」
夜見の手には以前に藍華がプレゼントした結芽似のイチゴ大福ネコのキーホルダーが握られていた。
「良かったぁ…ありがとう、夜見お姉さん」
「結芽ちゃん？それ……」
藍華はきょとんとした様子で結芽似イチゴ大福ネコを指差す。
「うん！ちゃんといつも持ち歩いてるよ？藍華お姉さんが作って……」
「可愛い！結芽ちゃんイチゴ大福ネコになっちゃった！誰に作ってもらったの？」
「……え？」
御前試合の日に自分達の為に精魂込めて作った親衛隊イチゴ大福ネコをプレゼントしてくれた藍華本人の言葉に親衛隊の面々の表情が凍りつく。
「藍華さん……何を言ってますの？」

「御前試合の日、僕たちにプレゼントしてくれたじゃないか……」
「私が？私じゃないよ？もし作ってプレゼントしたなら忘れるわけないもん」
　藍華は困惑した様子でイチゴ大福ネコのキーホルダーを作ったのは自分ではないと否定する。
「そんな訳ないよ！ほら！真希お姉さんにも！寿々花お姉さんにも！夜見お姉さんにも！これ全部藍華お姉さんが作ってプレゼントしたんだよ!?」
　結芽は真希達のポケットからそれぞれのキーホルダーを取り出すと、藍華の目の前でそれらを広げた。しかし、藍華は困惑したままだ。
「……ううん……私じゃないよ。作ったこともプレゼントしたことも……記憶にないもん」
「藍華……お姉さん……」
　藍華の言葉に軽い放心状態となった結芽は床にキーホルダーを落としてしまう。
　この出来事から、笑顔の守り人である剣崎藍華の忌むべき過去を結芽達は知ることとなる。

第十八話

「藍華は？」
『はい、本人には睡眠時の脳波の検査と伝えています。一時間程はかかるかと』
「分かった。後は頼む」
　相楽学長は夜見と藍華が眠っていた医務室にて職務用に使う携帯電話で折神家職員である検査課職員と連絡を取っていた。夜見はベッドから身体を起こし、結芽は夜見の隣に腰掛けている。
「獅童さん、ドアに鍵をかけてくれる？」
「はい」
　千里に頼まれた真希はドアを開けて周りに人がいないことを確認すると、ドアの通路側に《面会禁止》と書かれた札とドアに鍵をかけた。その後、医務室には重い空気が漂いはじめる。
「相楽学長……単刀直入に言います。藍華は……何者なのですか？」
「夜見さんの御刀は正確に藍華さんの肝臓部分を貫いていました。常人であれば出血多量で死は免れなかったはず。現に、藍華さんを運んだ私と真希さんも血塗れになるほど

出血していたのですから」
　重い空気を最初に切り裂いた真希に続き、寿々花は藍華自身が言っていた〝丈夫〟などでは片付くような問題ではない彼女の常人離れした回復力について追求する。
　夜見の暴走を聞いて駆けつけた真希達は水神切兼光が藍華の腹部を貫き、彼女の夥しい鮮血が地面を真っ赤に染め上げていた光景が目に焼き付いていた。
「私のせいなの……私があの子を止められなかったから……」
　千里はそう吐き出すように言うと左肩を右手で強く握り締めながら、涙で濡れた顔を隠すように俯く。
「千里、あの時に自分を責めるのはもうやめろと言ったはずだ」
　そう言って相楽学長は胸ポケットからハンカチを取り出し、千里へ差し出す
「ごめんなさい……」
　千里は謝罪すると相楽学長からハンカチを受け取ると、眼鏡を外しハンカチで涙を拭う。
「お前達には全てをここで話しておこうと思う。言うまでもないが、他言は一切無用だ。今から話すことは折神家でもごく一部の人間しか知らない極秘事項なんだ」
　相楽学長が釘を刺すように親衛隊の面々に鋭い目線を向けると、彼女たちは愚問だと言わんばかりに頷いた。

「皆も知っているだろうが、私は雪那と共に折神紫の指示のもとノロの研究に注力している。不治の病に苦しむ人々を救うことができる日が来ると信じてな」

どこから現れるかもわからず、本能のまま人々を襲う恐怖の対象である荒魂のノロが人々を救うなど到底信じられない話だ。

しかし生物の猛毒から血清を作り出し、人体を蝕むウィルスならワクチンを作り出し、人類は元来危険と言われていた物を研究、最適化し多くの人々を救ってきた。

ノロも同じように病に侵されている人々を救うことができるはずだと相楽学長は信じていた。

「その研究に研究に携わってきたのは私と雪那だけではない。私と同じ元綾小路の刀使である千里に……小野原藍奈（おのはら　あいな）という私達のかっての親友もだ」

小野原藍那。その名前を口にした相楽学長は自責の念に囚われているような悲しげな表情を浮かべた。

「小野原…藍那？」

「綾小路武芸学舎時代の私達の後輩だった女だ。腕はもちろん、医学に精通していた藍那は千里と共に相模湾岸大災厄では医療班として活躍してくれた。その後、私達はノロの研究の為に研究チームを結成し、一丸となって研究に没頭した。ずっとこのまま3人で人々を救う手助けが出来ると信じていたんだ……あの日が来るまでは……」

『藍那！自分が何を言っているか分かっているのか!?』
『結月！乱暴はやめて！』
顕微鏡や試験管、様々な薬品が並ぶ薬品棚が置かれた研究室に結月の怒声が響き渡る。
白衣の研究服姿の結月は剣幕な様子で、藍那と呼ばれた背中まで届くほど長い青空の様な色の髪を持つ白衣の女性の胸ぐらを掴んでいた。青髪の女性は抵抗する素振りは見せず、千里はなんとか二人の間に入り仲裁をしようとしていた。
『もう一度言います。効率の高い人体実験の為に被検体用のクローンを作成すべきです』
藍那と呼ばれた女性は結月の手を払いのけて、乱れた白衣を整えながらそう口にした。藍那の提案は法律的にも倫理的にも反する物であった。クローンで生まれようと、母親から生まれようとそれは生を受けた一人の人間には変わらない。実験のためだけに生み出され、被検体になる未来を強要するのは奴隷として命を生み出すのと変わらない。相楽学長が激怒するのも無理はない。
『藍那ちゃん、研究員の貴女なら知っているはずでしょう？それは……』
『法律的にも倫理的にも反するですか？そんな事は分かっています。ですが、迅速に研

究結果を得る為には必要です』
『そんな禁忌に手を染めてまで得るべき結果なんてあるものか！』
『人類の敵であり異形の化け物の元を投与する研究に携わっていておきながら、そんな綺麗事を口にできるんですね』
『貴様！』
その一言が結月の逆鱗に触れ、藍那の左頬に彼女の拳が叩き込まれた。藍那は衝撃でバランスを崩し、床に崩れ落ちた
『藍那ちゃん！』
千里は藍那に駆け寄り胸ポケットから取り出したハンカチを手渡す。藍那はハンカチを受け取ると、鈍い痛みが残る頬と自身の歯で切り血が滲んでいる唇に当てる。
『ありがとうございます……』
そう言って立ち上がり、ただ憐れむ様な表情で血の様に赤い瞳を結月に向ける。
『藍那……2、3日休んでくれ。またお互い冷静になった時に改めて話し合いたい。それと……殴ってすまなかった……』
綾小路時代からの後輩であり、ここまでついて来てくれた藍那に怪我を負わせてしまった事に自責の念を抱いた結月はそう言って藍那に背を向けた。
『結月……』

『……大丈夫ですよ、すぐに治りますから。千里先輩、ハンカチは後日洗濯してお返ししします。今日はお先に失礼しますね』

藍那は去り際にそう言い残すと千里に笑みを浮かべ、その場を後にした。藍那が去った後、残された二人は口を開かず、研究室には静寂が訪れた。

「その後、藍那さんと和解なされたのですか?」

寿々花の問いに相楽学長は苦虫を噛み潰したような表情で唇を噛んだ後、口を開いた。

「……出来なかった。それどころか、あいつと良き後輩としてあった日はあれが最後になってしまったんだ」

「それから藍那ちゃんは達の前から姿を消してしまったわ。あの子に同調した何人かの研究員を連れて……」

「その後、警視庁と連携し行方をくらました藍那と研究員達の捜索が始まった。無断で極秘であるノロの研究データを持ち出したまま野放しには出来なかったからな。だが一切の情報が入らず、五年間も藍那は水面下で研究を続けていたんだ。そして、藍那達の潜伏先が判明した私達は……」

藍那が結月達の前から姿を消して五年後、綾小路武芸学舎の研究棟として十年以上前に使われていた廃墟の地下に潜伏していると藍那と共に姿を消した研究員から刀剣類管理局への内部告発があった。

内部告発をした研究員の手引きで旧研究棟の地下へ侵入した結月率いる拘束チームは気取られずに研究員達を拘束し、ついに藍那がいる研究室へ突入した

『突入!』

防弾シールドを携えた機動隊員がドアを蹴り破ったのを合図に、研究室になだれ込む。それに気づいた藍那は自身に銃を向ける機動隊員達に護身用と思われる拳銃を向ける。あの頃と変わらない白衣姿の藍那の背後には、真っ白のベッドで眠る青空色の長い髪を持つ病衣姿の少女が眠っていた。

『藍那!銃を降ろせ!そうすれば危害は加えない!』

『藍那ちゃん!お願い……言うことを聞いて!』

『これはこれは結月先輩に千里先輩ではないですか。まさか久しぶりの再会に物騒な人達まで連れてくるなんて』

十数人の機動隊員にサブマシンガンを向けられている状況で、拳銃の銃口を周りに向けながら藍那は皮肉めいたことを口にする。

『藍那ちゃん……銃を捨てて……貴女を助けたいの……』

千里は今にも泣き出しそうな表情で藍那に訴えかけるが、その行動が藍那の神経を逆撫でする事となる。

『何を今更！私の考えを否定した癖に！この子は……私の娘は誰にも渡さない！この子は救世主となるんだ！お前達に渡すものか！』

激昂した藍那は拳銃の引き金を引いた。銃口から吐き出された弾丸は千里の左胸を貫き、床に伏させた。発砲とほぼ同時に機動隊員達のサブマシンガンも火を吹き、藍那は無数の弾丸に白衣を赤く染めあげられて力無く倒れ込んだ。

『千里！』

結月は千里の真っ赤に染まりつつある左胸を圧迫し止血を試る。機動隊員達は藍那と少女を確保する為にゆっくりと彼女達に近づいていく。

機動隊員の一人が藍那の首筋に手を安否を確認するが、脈に触れることはできず既に事切れていた。

彼らは刀剣類管理局へ無線にて藍那をやむを得ずに射殺したと言う報告を行い、藍那と青髪の少女を運び出そうとした時

『だいじょうぶ……』

青髪の少女は消えてしまいそうな声でそう呟きベッドから立ち上がると、弱々しい足

取りでピクリとも動かない藍那のそばに歩み寄る。そして、彼女の体に手を当てると少女の身体から青白い光の粒子が現れて藍那を包み込み、そしてそれは次第に広がっていき研究室全体を包み込んだ

『これは……一体……』

「その後、光が晴れると千里の藍那の傷口が綺麗に塞がっていたんだ。その少女のおかげで千里は生き長らえ、こうして今ここにいる」

「その榊先生を救った少女の名は……」

青白い粒子が体を包み込み身体を癒した。山狩りの夜、夜見は相楽学長が目の当たりにした現象に見覚えがあった夜見はそう口にすると、相楽学長は頷き口を開く。

「ああ……後に親衛隊第五席となる少女……〝剣崎藍華〟だ」